東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

2015 年度

修　士　論　文

不確かなセクシュアリティをケアする場
―レズビアン・バイセクシュアル女性のセンターLOUD の事例より

The topos of caring for precarious Sexuality
― A case study of the Lesbian and Bisexual center "LOUD"

2016 年 1 月 25 日提出

指導教員　清水 亮 准教授

座 間　　聖 季
Zama, Saki

不確かなセクシュアリティをケアする場

―レズビアン・バイセクシュアル女性のセンターLOUDの事例より

The topos of caring for precarious Sexuality

– A case study of the Lesbian and Bisexual center “LOUD”

目次

Ⅰ　問題の所在 1

1.　研究背景 1

1-1.　黙殺される＜生＞の問題 1

1-2.　注目されるゲイリブ 3

1-3.　「シャイニくない」ゲイの存在 4

2.　先行研究 7

2-1.　つながるためのコミュニタイジング 7

2-2.　性から＜生＞の問題へ 8

Ⅱ　本研究の目的と構成 10

1.　ケアが求められる理由 10

1-1.　セクシュアルマイノリティが抱える問題とは 10

1-1-1.　日常における機会喪失 10

1-1-2.　自尊感情の抑圧 12

1-2.　見えない孤立 13

1-2-1.　カミングアウトできない社会　―「不承認」と「歪められた承認」 13

1-2-2.　自分自身を黙殺するということ 16

1-3.　小括　―本研究の目的 18

2.　研究手法・分析視点 19

2-1.　研究手法 19

2-2.　分析視点 20

2-2-1.　アイデンティティとスティグマの視点 20

2-2-2.　本論が依拠するアイデンティティ論 21

3.　研究構成 22

4.　用語の定義 23

4-1.　「セクシュアルマイノリティ」「当事者」の定義 23

4-2.　各種用語の定義 24

Ⅲ　セクシュアルマイノリティ女性のためのスペース LOUD 27

1.　LOUD の概観 27

1-1.　活動概要 27

1-2.　歴史的背景 31

1-2-1. 1990 年当時の「女性」とレズビアンの活動 31

1-2-2. セクシュアルマイノリティ当事者としての活動をめぐる状況 33

1-2-3. LOUD 創設及び運営時の課題 34

1-3.　地理的背景 36

2.　運営上の理念 40

2-1.　声をあげるための場所 40

2-2.　シェルターとしての役割 42

2-3.　コミュニティセンターとしての機能 43

3.　小括 44

Ⅳ　LOUD オープンデーの役割 46

1.　オープンデーの様子 46

1-1.　オープンデーの流れと概要 46

1-2.　参加者と参加形態 47

1-3.　オープンデー運営におけるスタッフの意識 49

1-3-1. 最小限の介入 49

1-3-2.　「自分たちのできる範囲」で 50

2.　A.I.氏のケース 50

2-1.　安心できる場所を求めて 50

2-2.　定まらないアイデンティティ 51

2-3.　セクマイ「あるあるの話」 52

3.　T 氏のケース 53

3-1.　セクシュアリティ関連の書籍への関心 54

3-2.　新しい活動への広がり 54

4.　A 氏のケース 55

4-1.　参加条件をめぐる自問 55

4-2.　セクマイコミュニティ参加の動機の変化 57

5.　LOUD オープンデーについての考察 58

5-1.　「わからない」状態への受容 58

5-2.　「出会う」というニーズ 59

5-3.　小括 60

V　考察 61

1.　LOUD の特徴 61

1-1.　当事者に＜開かれた＞場所、という意味 61

1-1-1.　誰でも“行ける” ―MtF レズビアンらの存在 61

1-1-2.　“入れる”空気感　―否定のない共感 63

1-1-3.　“出ていける”関係性　―LOUD 外に繋げる 65

1-2.　社会に＜開かれた＞場所、という意味 67

1-2-1.　本来の目的―　社会に声をあげる 68

1-2-2.　参加者に与える結果―　自分の声をみつける 69

2.　ケアのある場所としての意義 71

2-1.　場所というケア 71

2-2.　不確かなセクシュアリティへのケア 73

参考文献 78

謝辞

Ⅰ　問題の所在

1.　研究背景

1-1.　黙殺される＜生＞の問題

近年レズビアンやゲイといったLGBT[1]をはじめとするセクシュアルマイノリティの存在が、社会的な権利獲得の動きや、経済的価値のある市場といった点で注目されつつある。日本は2008年国連人権理事会で「性的指向と性自認に基づく差別の撤廃」を求められて以来勧告を受けており、2015年には超党派の「性的少数者問題を考える国会議員連盟」が結成され、渋谷区で通称「同性パートナーシップ条例[2]」が制定されたことなどは各種メディアでも取り上げられた。一方で、同性婚などの社会的制度には賛成できるものの身近な存在に対して抵抗感を抱く人は多いことが明らかにされ[3]、セクシュアルマイノリティ当事者が自身について語ることは多くない。市井の当事者の存在は未だに見えない存在であり、その生きる姿は身近な人にこそ隠し通そうとされることもある。

レズビアンとして生きるKK氏は、亡くなったトランスの友人Iについて語る。

> *結局さアイツが死んだとき、すごい保守的だしカタい家庭環境だったからさ、そのとき一緒に暮らしてつきあってた彼女はさ、葬儀場の端っこの方にしか座れなかったの。ぜんぜんIのことなんて知らない高校の部活の子たちはきちんと集められてさ。…（中略）…生きよう生きようってして、うっかりだったんだと思うけど、バカだよねえ、運が悪かったのかもしれないけど*（2015/10、KK氏インタビュー）

---

[1]レズビアン（L）、ゲイ（G）は恋愛対象・性的指向が自身の生物学的性と同じである。バイセクシュアル（B）は、恋愛対象・性的指向が男女両性である。トランスジェンダー（T）は生物学的な性と社会的な性役割の自認 が一致せず、外科的手術を用いて の性転換手術や性別適手術を望まない。

[2]正式名称は渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例、同性間のパートナーシップ関係を認めている。

[3] 2015年11月28日「性的マイノリティについての全国調査：意識と政策」 調査報告会より

これは、ある 20 代のレズビアン KK が、トランスジェンダーの友人を亡くしたことを振り返って語ったものである。ここで語られる「I」、「アイツ」は、KK 氏が通った女子高時代の後輩であり、戸籍上は女性であるものの実生活では男性として働き、いくつかの性別適合手術と改名を終えた段階で、女性パートナーと共に暮らしていた。KK の両親は「娘が男性として生活していること」を認めることが難しく、そのことに気づいていた KK は親族との連絡を最小限に留めて生活を送っていた。そのようなときに、「アイツ」は不慮の死に見舞われ、KK は葬儀に参列した。

KK と共に暮らしていた相手は当然、内縁関係とも交際相手とも認められず、葬儀の会場の片隅に追いやられていた。生前の様子についてのスピーチは、KK とのつきあいが絶えていた女子高時代の友人によってなされ、葬儀の場においては男性として生きた KK の生活は、なかったものとして扱われた。一般的に、概念として「セクシュアルマイノリティ」という存在がいることは広く知られつつある。しかし、実際に当事者がどのように生きていたのかについては、受け入れられがたく、公の場で語られることができない場合がある。被災者支援のミクロ・ボランティアでは、ひとりひとりの被災者の生活の回復を、私的領域の問題として留めたり、あるいは切り捨てずに支援していく様子がみられた。これは「その人その人の人間としての存在のあり方、生存のありかたとしての固有性を尊重」する＜生の固有性＞にこだわる考え方だと分析された（似田貝、2006）[i]。＜生の固有性＞が支援者からも大切にされ、人が存在し生きる上で見過ごせないものであるのだとすれば、セクシュアルマイノリティとして生きた KK の＜生の固有性＞は黙殺されていたと言えないだろうか。

本稿では、その人その人の人間としての存在のあり方を、＜生＞と表現する。左利き人口と同じ位の割合でいるとされるセクシュアルマイノリティの存在が見えづらいのは、当事者がセクシュアリティについて語り出さないよう気を付けているのと同時に、「趣味だと思われる」「なかったことになる」と語られるように「ないことが当たり前」という圧力に黙殺されているという構造に置かれているからといえる。そもそも生きているとして捉えられない＜生＞は、傷ついたり失われたりしても気づかれることすらないだろう（バトラー、2012）[ii]。

1-2.　注目されるゲイリブ

米国連邦最高裁判所は 2015 年 6 月に同性婚を認める判決を下し、国際的に LGBT ら当事者の権利への関心が高まりつつある。日本でも 1990 年代から当事者らによる社会運動が行われており、特に近年は「LGBT」や「性的マイノリティ」といったワードがメディアで取り上げられることも多く、一見その存在が顕在化しつつあるようだ。

実際、2015 年の東京レインボープライド[4]と呼ばれる当事者の社会運動では“生”と“性”を祝福したパレード＆フェスタが行われ、過去最大規模の、のべ 6 万人を動員した。会場には、多様性を象徴する虹色の旗や、色とりどりのバルーンが装飾され、ブラスバンドや鮮やかな衣装をまとった人々を交えて、一般参加者らが数千人規模のパレードで渋谷区を練り歩いた。その様子は、同年渋谷区が制定した通称、同性パートナーシップ条例とあわせてメディア等で注目された。2013 年には元タカラジェンヌの女性が同性パートナーと東京ディズニーリゾートで挙式したレズビアンタレントのウェディング姿が報じられた。国内の式場の一部が同性間の挙式を認めるようになり、レインボープライドのブース出展においてもフォトブライダイルイベントも行われていた。一方で、結婚は LGBT や性的マイノリティの問題の全てではないにも関わらず、注目が集まりすぎたために、トランスジェンダーやその他の課題が見落とされているのではないかという声も上がった。[5]同性パートナーシップの権利獲得は当事者の社会運動のアジェンダの一つであるが、一方で、「同性婚」は、法的保護や「正しい家族」のあり方への再考という点で必ずしも一枚岩に当事者の課題を解決するものではない（堀江、2010）。また、渋谷区の同性パートナーシップの承認条件となる、公正証書取得にあたっては取得のための費用が大きいことから、経済的困難にある制度利用希望者らには「絵に描いた餅」とされる場合もあり、システム作りのためにビジネスとして成立させようとしているという見方もある。たしかにアメリカで始まったゲイパレードの流れを汲むプライドパレードは、市場経済との結びつきを戦略的に採用することで可視化を図り運動が進められてきたとされる。（清水、

---

[4] LGBT などセクシュアルマイノリティについての理解を深めるイベントで、多様性を象徴するレインボーカラーを掲げた「プライドパレード」は世界各地で行われている。

[5] 東京レインボープライド関係者間においても、メディアで注目されなかったいくつかの企画や、ゲイ・レズビアンだけでない当事者についての課題検討がなされており、企画者側も特定のセクシャリティリティに偏らないよう組織運営上の配慮等がなされている（2015 年 7 月ヒアリングより）。

2013）[iii]。日本でも、2015 年 8 月号の日経ビジネスによれば、LGBT に関連する消費傾向（レインボー消費）は 5.9 兆円とされ、消費者としての需要が期待されている。消費者を相手にする企業がビジネス上マイノリティ―に配慮する点に限らず、産業分野の企業までもが LGBT 支援を経営テーマの一つに位置づけ始め[6]、働き手、投資家がダイバーシティを評価しつつある。実際、LGBT ファイナンス[7]に加盟する大企業や、LGBT マーケットを意識する企業が、東京レインボープライドを協賛することが多い。近年のセクシュアルマイノリティ当事者のパレードは、その存在の可視化を目指すために戦略として「政治的なスローガン」を掲げずに、結果として非当事者を含めた多様な参加者の表象に成功し、偏見を抱かれるイメージの攪乱を実践しているという見方もある。（堀川、2014）[iv]セクシュアルマイノリティコミュニティの成長や可視化といったゲイ解放運動は、権利運動意識と集団意識に裏打ちされた、ゲイ[8]リブと呼ばれることがある。差別的な態度に限らず制度的にもセクシュアルマイノリティを不可視な存在として追いやる社会に対して風穴を開けようと苦心し取り組み続けられてきた活動によって、制度制定や権利獲得のイメージや、認められる市場価値の側面において、LGBT やセクシュアルマイノリティの存在は社会的に認知され始めている。

1-3. 「シャイニくない」ゲイの存在

ゲイリブが注目されるなかで、担い手としてメディア露出したり表舞台に立つようなセクシュアルマイノリティ当事者らや、一部の羨望の対象となるような当事者らが「シャイニーゲイ」と呼ばれ、LGBT のイメージを形成するような状況も見られるようになってきた。「シャイニーゲイ」とはインターネット上の SNS を中心に、2016 年の東京レインボープライド当日に特に使用された用語であり、私生活などが輝いて（シャイニー）見えるゲイを指す。シャイ

---

[6] 平成 14 年の男女共同参画会議基本問題専門調査会で、アメリカの IBM グローバルの雇用・サービスのダイバーシティがついて取り上げられた。ブラック、アジアン、ヒスパニック、女性、等に並び、ゲイ・レズビアンがグループ分けられている。

[7] 日系企業では野村證券が参加しているが、現時点ではゴールドマン・サックス、バークレイズ、JP モルガン、EY、ドイツ証券、といった大手外資系企業が中心である。

[8] 欧米では同性愛者全般を指してゲイと呼称することがある。「ゲイリブ」は、ゲイリブに参加しない当事者から羨望と冷やかしをこめて「お行儀のいいゲイの活動」などと呼ばれることもある。一部のゲイリブは HIV／AIDS の問題に対応して活動し発達した。

ニーゲイ、の用語への注目について、インターネット上のニュース記事では、メディアによって可視化されるセクシュアルマイノリティ当事者の特徴を以下のように分析している。

なんだか「彼氏とパレードを虹の旗振って歩ける、メディアが『LGBT 市場!!』『LGBT 人材の活用!!』とかいう特集をやりたいときにまさにピッタリな人物像」を揶揄して言うみたいなところがある気がするのよね、シャイニーゲイって言葉には。
別にそういう生き方が悪いっていうんじゃないのよ。ダイバーシティよ、それこそ。
ただ、シャイニーゲイの皆様のまぶしさに目をくらまされた人々が「SHINE！ すべてのゲイが輝く社会へ!! ゲイはリッチで高学歴！ アートでクリエイティブな才能を秘めている！ さあみんなオープンにしていいんだよ！ ほらほら君もゲイなんでしょ？　ありのままの自分でいいんだよ～隠さず正直に言ってごらん！ そして本来の才能を発揮して社会に貢献するんだ!! 頑張ろうニッポン!!」とか言い出したら
正直めんどくさいじゃない？（2CHOPO「まきむぅの虹色 NEWS サテライト」）[v]

大規模なパレードやメディアで LGBT として取り上げられるのは、このようなシャイニーゲイであることが多く、同性婚についても容姿が良いレズビアンカップルのようなメディア受けするイメージが先行しそうであると危惧する当事者の声も聞かれる。

ある程度行くとこまで行きついて、「次のゲイシーンのムーブメント」と言われても、
「次にガチムチが肛門に挿入したがる違法ドラッグは何かしら？」
くらいしか思い浮かばない、半ば腐り果てたかのような日本のゲイシーンが、この期に及んで一般社会から注目を浴びるとは予想もしていなかった。
今年はゲイシーンに光が当てられた年でもあったのだ。

（中略）

思い出すのが、以前かかわっていたガチムチ・イケメン至上主義のゲイ雑誌に「もっとブスを扱ってよ！」という今考えればどだい無理な提案をしたときに即答されたこの言葉である。
「ブスは金になりませんよ」
これからのゲイシーンは、一般社会から光が当てられた分、ブスや無職といったゼニゴケ類は死に絶えてしまうのだろうか。

（LetbeeLife「サムソン高橋の非シャイニーゲイ宣言①「ホモには無職もホームレスもいる」」）[vi]

オンライン記事を執筆するサムソン高橋は、プライドパレードのような可視化の運動を社会変化の兆しとして肯定しつつも、無職や低所得の当事者が存在することを強調する。

ここには「マイノリティが集合行動によって社会的に承認を求めていくことは、マジョリティによって許容できる定義を確定し、マジョリティに受容される像―許容範囲―をマイノリティ自身が生み出し、そこに載った上で、規範を再生産していくことと表裏一体である。」というマイノリティに課せられる「ジレンマ」（堀江、2015）が見られる。

特に、同性婚というテーマが注目された場合は、同性愛者であるゲイとレズビアンの存在は注目されるものの、トランスジェンダーやアセクシュアルやインターセックスなどのセクシュアルマイノリティの個別の問題は取り上げられにくい。プライドパレード運営者らの間でも、パレードによる可視化に併せて、当事者内の多様な問題について取り組む活動と連携していく重要性が認識されており、レインボーウィークといったイベントの週間などが仕組まれている（2015 年 7 月インタビュー）このように、ゲイリブ運動やマスメディアによるセクシュアルマイノリティ可視化の動きは、必ずしも「シャイニくない」個別の当事者の存在の可視化へとはつながらず、むしろ LGBT イメージとして許容されない当事者をますます不可視に追いやることも懸念される。伊藤は、日本のゲイ・ムーヴメントが取ってきた戦略について、「アイデンティティの政治は多くの成果を収めてきたが、それは境界の外に対しては異質性を、うちに対しては同質性を強いる。その帰結としてマジョリティが拠って立つ普遍的基盤はそのままで、マイノリティは特殊な集団として棲み分けられる」という（伊藤、2005[vii]）。

「同性結婚式がニュースになるのはうれしい。でも、いつまでもニュースになるのは悲しい」[9]というメッセージがある。セクシュアルマイノリティが、特別なものとして扱われる限り、同じ世界に存在する＜生＞は依然、認められていない。

「ＬＧＢＴ」の概念が顕在化する社会運動だけでなく、実体としての「シャイニくないゲイ」の存在に目を向けることは、社会を検討するための両輪として欠かせない。さらには、な

---

9 「“好き”に変はない展」キャッチフレーズより　http://sukiten.jp/index_ja.html

ぜ「シャイニくない」当事者が姿を現さない、あるいは現せないのかについて考える余地があるだろう。

2. 先行研究

2-1. つながるためのコミュニタイジング

なぜこのような状況が生じ、当事者はどのように生きるのかを巡るようなセクシュアルマイノリティにかかわる問いは、1990 年代以降社会学を中心に「セクシュアリティ研究」という一つのテーマとして勃興した。1990 年以前の日本の社会学においては、同性愛をメインテーマとする研究が独立した一本の論文として著されることはなく、言及されるものについては主に社会病理学的なアプローチが取られていた。1990 年代に入り、セクシュアリティ研究という学際的なアプローチがとられるようになり、理論研究と調査研究の両面が取り組まれるようになった。2000 年代になるとレズビアン・女性同性愛についての論文の萌芽がみられ、また家族に表象されるような親密な関係にかかわる研究が台頭してきた。依拠する社会学理論や手法が明示されない論文が多く理論的枠組みの不在は指摘されるが、一方で既往理論の有効性が問われているとすれば、これまで継続されてきた多様なテーマの論文数は、多くの研究者による模索の軌跡とも解釈できるとされる（志田、2014）。そしてセクシュアリティ研究は、アイデンティティやカミングアウトの問題を扱いながら、学際横断的に多様化し続けた。

ゲイの世界は、「より広範囲の文化的問題を排除し、セクシュアリティのみを強調すること、またより広範囲な性的および社会的抑圧という意味、すなわち真のコミュニティという意味を拒絶した「疑似コミュニティ」を建設することを指す」「ゲットー・メンタリティ」をもっていると考えられた。それに対してアルトマンはゲイというアイデンティティを肯定的に捉え、カテゴリーをあえて掲げることで政治への志向性を打ち出したゲイ解放運動について記述した。その後、運動をめぐる議論はアイデンティティから「関係権（あるいは関係性）」へという方向性へと移る（河口、2003）[viii]。

なかでもフィールドワークを用いた研究では、セクシュアルマイノリティのアイデンティティの構築の過程を捉えようとする狙いのものと、ゲイやレズビアンの置かれてきた状況を歴史的・社会的に位置づける狙いのもの（小山ら、2014）[ix]がある。2000 年以降、双方の狙いを総括的に扱う研究が取り組まれつつある。例えば砂川（2015）は、ゲイコミュニティとして語られるものを考察するにあたり、ゲイがおかれている様々な社会状況が反映されている場所とし

ての新宿二丁目をフィールドワークを通じて観察し、「セクシュアリティ」が性的な魅力に限らない人と人を結びつける社会の土台を成す要因となっていることを分析した。そしてゲイ・コミュニティを、都市的なコミュニティが生成する一つのパターンと捉え、そこに所属する者のアイデンティティと不可分な、コミュニティ感を醸成し続ける不断の＜コミュニタイジング＞と定義した。また、堀江（2015）[x]は、日本にあるセクシュアル・マイノリティをめぐるキリスト教系コミュニティ ECQA について調査するにあたり、レズビアン・コミュニティをアイデンティティの探索における「選び取られたコミュニティ」とみなす。この ECQA では＜支援―非支援＞の関係性のピア・サポートが行われており、一時的な通過点として機能していることを指摘している。この通過点を提供し続けるというコミュニティとしての不可能性が、コミュニティそのものと参加者のアイデンティティの輪郭を描き出す、アイデンティティポリティクスの遂行となっていると結論付ける。いずれの論者も、不断の実践としてのコミュニタイジング、いうならば現代的なコミュニティのあり方が、そこに所属する人のアイデンティティ形成に関与することを指摘したうえで、そのことが揺らぐ性的マイノリティとしてのアイデンティティの確立を援護すると考察している。これらの研究からは、コミュニティとして語られるものへの参加が何らかの形で当事者のアイデンティティを鼓舞し、当事者が他の当事者と社会関係を構築していく様子が見られる。同時に、コミュニティという可視化された集団が形づくられていくことで、当事者は他者とのつながりを獲得する手掛かりを得る。

セクシュアルマイノリティ当事者らのアイデンティティは、不断のコミュニティにおける実践性に基づいたコミュニタイジングと深くかかわっている。しかし、このようなコミュニティがなぜ参加者から求められ、どのような関係が生じているのかについては、それぞれの研究の主旨から外れるためか分析がなされていない。

2-2.　性から＜生＞の問題へ

先に述べたように社会学におけるセクシュアリティ研究にはアイデンティティを扱うものが多かったが、近年の研究で「コミュニティ」が論じられるように、研究の視座は人と人のつながりといった当事者の社会的関係という点にも目が向けられつつある。たとえば 2001 年にゲイのエイジング問題を扱った、高齢化社会と老年化による身体の「ままならなさ」への関心を土台とした研究がある。これはゲイが男性中心社会の既存のライフコースを外れてきたことでエイジングにおいてアドバンテージがあると指摘し、異性愛者の生き方を相対化しつつ、より広い社会的文脈において＜つながり＞の再構築という課題を発見する（小倉、2001）[xi]。この

研究では「ゲイ」といったセクシュアルマイノリティとしてのアイデンティティに固定されず、多層的なアイデンティティを生きる人間の存在の＜生＞のあり方を問い直し、共通基盤としてのあるべき姿が模索されている。実際の活動として「暮らしやお金、そして自分が年をとるという問題」を重視し、セクシュアリティについての理解や共感を広げていくことと同じかそれ以上に、地に足の着いた生身の関係をつないでいく志向のライフプランニング研究会の取り組みなども存在する（永易、2015）[xii]。以上のように、セクシュアルマイノリティをめぐる状況や生き方の研究は、セクシュアリティという性とアイデンティティをめぐる問題を含んだ、広く人間の＜生＞のあり方の問題として捉えられつつある。

Ⅱ　本研究の目的と構成

1.　ケアが求められる理由

ケアという語は、看護学と福祉分野で採用されて以来、「自立」を前提とした社会観を照射するとともに、社会的弱者に限らず誰もが受けるものとして、人が自立するための支え合いや気遣い（caring about）としても検討されつつある（佐藤、2010）[xiii]。

本研究においてはケアについて、近年のケア論研究者の考察を鑑みた Engster による「意図をもって適切に他者のため（for good）[10]になろうとする傾向があるときに、人が他者をケアしていると呼ばれる」（Engster、2007）[xiv]という解釈に依拠する。このときに想定されるケアは、相手のため（for good）の配慮全般を指し、必ずしも一対一の対人関係における行為に限定せずに、複数のアクターによる相互行為として捉えていく。

1-1.　セクシュアルマイノリティが抱える問題とは

1-1-1.　日常における機会喪失

男女異性愛や、ストレートのセクシュアリティを前提としていた社会制度によって、セクシュアルマイノリティ当事者は、当事者が排除されたり、あるいは法的保護を受けられないことがある。就労、教育、福祉制度の受給など。教育現場・職場・地域社会で異性愛が前提とされたヘテロセクシズムについての分析（原田、2004[xv]）によれば、それぞれの場面で当事者は心理的困難と同時に実質的な不利益を抱えていることが分かる。

就労においては、望まない性別の服装やふるまいを強要されることや、身体への接触などのハラスメントなどがあげられる。管理職の年代にある 40 代男性にこそ、同じ職場にセクシュアルマイノリティ当事者がいないでほしいと回答する割合が高い。結婚についての話題や、キャバクラ・風俗を通じた社員間の交流が、当事者にとっては困難な状況を意味することがある。近年では、職場環境の働きやすさは、当事者が職場に居続けやすいのかという点に関連したダイバーシティマネジメントとして、企業のイメージ戦略や人事の課題として扱われつつあ

---

[10] 筆者翻訳による。for good の訳について、good は「善」とも訳される。近年、議論される正義（the right）に対して善（the good）が意識されている可能性がある。

る。性的指向を理由とした差別禁止の社内規定の決めたり、職場のメンタルヘルスに関与するカウンセラーがセクシュアルマイノリティについて学ぶよう促されるが、実際には取り組みを行うのは国外に拠点を置く外資系企業のごく一部にとどまっている現状があり、人事部の担当者が「うちの会社にはセクシュアルマイノリティは一人もいない」と断言することもある。

また教育現場においては、同性愛やトランスのセクシュアリティについて取り上げられることがない。現在の高等学校家庭科用教科書では、非結婚の異性や同性カップルなどを法的に認めることについて触れられるが、初等教育においては保健体育、社会科等において、人間は異性を好きになるといった記述が見られる。また、セクシュアルマイノリティの存在について知らない教師から、当事者あるいは周囲の誰かを対象にした冗談やからかいを受けることもある。平成 25 年度東京都地域自殺対策緊急強化補助事業の助成を受けて実施された調査[11]によれば、小学生から高校生の間に不快なからかいを教師から受けた当事者はおよそ 1 割にのぼる。また、そのような誰かからのからかいによって受けた影響として「学校に行くのが嫌になった」（43%）「今でも、その経験を時々思い出す」（44%）「自殺を考えた」（32%）「クラスで孤立した」（28%）といった回答があがり、差別や偏見が当事者の教育を受ける機会を狭めてしまうとも考えられる。

教育の現場で、いるっていうのは大事だよね。子どもって素直だから、先生の言葉の通りに動いてしまうし。自殺率が、10代が一番高くて、次に 20 代、30 代、40 代と減っていくことがわかっている。子どもだと自分から情報を取りに行くこともできないし。親元を離れて暮らすっていうのもできないし。（2016 年 1 月 10 日Ｒ氏インタビュー）

以上のように語るレズビアンの当事者は、当事者の子どもが、周囲の大人の価値観や言動に影響を受けやすいという。

福祉制度の受給については、戸籍に基づく夫婦関係に相当するパートナー関係が認められず、それに伴い税制上の優遇や社会福祉制度の受給対象とならない。異性愛者の事実婚関係においては、法律上で婚姻関係に準ずるものとして扱われる一方、同性愛者間においては認められず、養子縁組にも困難が生じる。もちろん、法が、家族と呼べる親密な間柄を規定すること

---

[11] いのちリスペクト。ホワイト・リボンキャンペーン「LGBT の学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書」より。

はないだろう。しかし、結婚という社会的に承認される形が存在しないことによって、ときに親密な当事者関係が閉鎖的になったり、他者への説明を尽くしても正当にとりあわれない可能性があるという点で、家族創出の困難に直面しているといえる。

1-1-2.　自尊感情の抑圧

同性愛、ホモセクシュアルは、科学的には発達途中の一時的な経過としてみなされることもあった。また、矯正すべき病理として扱われることがあった。世界各国ではその病理を法的ないし医学的に治療すべきとして施策がなされることがあった。同性愛行為に対して刑事罰を科すソドミー法や、電気ショック療法や矯正レイプなどが挙げられる。同性愛や、異性愛から逸脱したセクシュアリティのあり方が、法制度や医学的な側面から認められないとき、望ましくないありかたとして捉えられることがある。日本では、ゲイの既婚男性者が社会的に認められた存在として生活していくために、女性と「結婚」した上で、ゲイカップルとのパートナー関係を続ける実態もある（前川、2012）[xvi]異性愛規範に基づいたパートナーとの関係性や婚姻が、会社や親せきづきあいと言った公の話題とされるとき、セクシュアルマイノリティ当事者は自らが間違っていると考える経験を持つことが多い。同時に、自身がセクシュアルマイノリティであることを話したときには「人と違う、変わっている人間に見られたいだけなんじゃなくて」「少し、ゆっくり考え直してみたら」「男（あるいは女）嫌いなの？」といった声をかけられることもあるという。

これらのような、日常的な困難に遭遇するたびに、当事者は生きづらさと自らのあり方に対する否定的な経験を繰り返し、「人格的同一性に対する暴力的な抑圧権利の剥奪、社会的価値や尊厳の剥奪といった経験」としての「社会的な創傷」（成、2004）[xvii]を受けることとなる。繰り返しの創傷は、自尊感情を抑圧する価値観を内面化し、次第にメンタルヘルスの悪化といった身体的な問題につながることも認められる。近年においては、ゲイ男性の自殺率の高さ（日高ら、2004）[xviii]が認められ、その他セクシュアルマイノリティの自尊感情の抑圧が、精神疾患の罹患率の高さとして表れることなども解明されてきた（石丸、2014）[xix]。もちろん、ゲイ、レズビアン、トランス、その他セクシュアリティの当事者が全て同一であるとは言えないが、社会的に「間違っている」とされるセクシュアリティの当事者は同様のプロセスをたどりやすいと考えられている。一見すれば異性愛者と同じようにふるまえるだろうと思われる、バイセクシュアル当事者であっても自己否定的な価値観を抱き、むしろ異性愛者に近いと思われるからこそ「治すべき趣味」として思い悩む場合もある。

個別の経験に限らず、そのような経験の累積によって培われた、自尊感情を抑圧するような価値観は内面化され、社会規範に反した落伍者であるという視点―ときに自殺に至るような、自らの＜生＞に対する強い否定的な価値観を抱くことがある。

1-2. 見えない孤立

1-2-1. カミングアウトできない社会 ―「不承認」と「歪められた承認」

誰しも他者に明かすことが難しいと思われる経験やアイデンティティを持つことがあるかもしれないが、社会規範から逸脱したセクシュアリティについてのカミングアウトは、身近な他者にこそ試みづらいという側面を持つ。

セクシュアルマイノリティ当事者が自身のセクシュアリティについて開示する「カミングアウト」は、これまで国内外問わず、カミングアウトの社会的意味については多くの研究がされてきた。社会運動論としての「レズビアンやゲイの運動」の分析によれば、ゲイ解放運動以降、当事者にとっての「カミングアウト」の意味合いが変化してきたといわれる。それは社会運動においては「解放」ではなく「抵抗」としての実践として捉えられ、発話者の日常生活においては「混乱」を生じさせ変容の契機を迫る試みとして位置づけられる。

日本では長らく同性愛が「変態性欲」として位置づけられ（古川、1996）[xx]、セクシュアルマイノリティは性的な欲望の問題として見られてきた。2015 年 11 月に神奈川県市議会議員が同性愛者を「異常動物」であるという発言がなされたように、公職の立場でも差別的発言ができる側面がある。調査によれば[12]、同性婚の法制化に賛成する人々が過半数である一方で、職場などの身近に同性愛者がいることに抵抗があると答える人も過半数であることがわかるように、集団としての可視化と、個々人の差別意識の撤廃は単純な相関関係に結びつけることは難しい。

公の話題として制度のことが語られる一方で、なぜセクシュアルマイノリティ当事者は他者に自分のセクシュアリティを開示するカミングアウトができないのか。日本における同性愛へ

[12] 2015 年 11 月 28 日、科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」「性的マイノリティについての全国調査：意識と政策」報告会より。

の寛容さが無関心であることについて研究する風間は、カムアウトについて以下のように述べる。

「友達などにカムアウトするときに、『そんな個人的なことを言わなくていいんじゃない。別に、お前がゲイであってもなくても、そんなこと気にしないから』とよく言われます。じつは「個人的」だとされることによって「ゲイであること」は言わなくてもよいこととされてしまうことがむしろ問題にされなければならないのではないか。じつは「個人的」だとされることによって、本当は社会では「個人的なこと」にはなっていない。つまり「語ってはいけないこと」とされるのです。」（風間、1997）[xxi]

この考察によれば、セクシュアリティの問題は公の場での実際的な困難[13]として生じる一方、そのことに対する異議申し立てや状況の変化への試みは、語るべきでない私的領域の話題として扱われてしまうことになる。すなわちカミングアウトは、単にセクシュアリティについて「告白」してプライバシーの守られたクローゼットから出るという意味ではなく、「私とあなたの関係（あるいは権力関係）によって定義され」たものであり、その関係性を解放させるのではなく抵抗し変容させることになる（大坪、2013）[xxii]。これは、うわさの的になったり、周囲の信用をなくしたり、ときに身近な人間関係を喪失するような「社会的な死」をもたらすリスクとなる。

レズビアンであることの生きづらさがあるとすれば、それは何かと当事者に訊ねたところ、「それは私たちに聞くことなのかな」と問い返された。

そうじゃない人たちの話を聞けばいいんじゃないかな。結局、こういう問題って自分の中の問題っていうよりも、<u>他に人がいて、その人と自分の接点に起きる問題</u>でしょ。だから何が生きづらさになっているかって、私たちじゃない、そのへんの人たちに聞いてみたほうがわかるんじゃないかな。ゲイについてどう思いますかーとかね。そうすればわかるはずだよ。 （2016/12/26 Y 氏インタビュー）

気持ちが悪いと思われることは、本来は普通に取られていたであろう会話の機会を失い、日常において他人と交流を持ちづらくなることがあるという。カミングアウトが問題なく受け入

---

[13] 前節Ⅱ１.1-1.セクシュアルマイノリティの＜痛み＞、にて説明。

れられるケースも当然あるのだが一方で、距離を置かれ連絡がつかなくなるといった場合も聞かれる。

A 氏は MTF レズビアンであり、東京に上京して 10 年以上働いている。職場でカミングアウトしたことはないし、今後もすることがないだろうと述べる。

> *日常的に難しい状況に直面することはあまりない。そもそも、自分について隠しているから。職場では人事担当者だけが自分の戸籍上の性別などを把握している。今の時代は、表向きはとても良い。職場もいい人たちばかりである。だから言わない。言ったときに、何も言われないと思うけれども、本心でどうなのかはわからないから、それで仕事に影響が出たらと思うと怖い。内心の問題って、それは行動に影響するものだから。よそよそしくなるとか、評価が下がるとか。パレードにも出たいわけではない。写真を撮られるかもしれないのが嫌だったというのもあるけれど、立場として出られない。知られるのは大事だと思うのだけど、自分はこわいという感じ。*（2016/12/27 A 氏インタビュー）

Y 氏も A 氏も、自分自身がセクシュアルマイノリティであることを、言わない限り「困難」は生じないという。

あるいは過剰な注目を受けることもある。レズビアンであることが知られた状態で他人と接すると「男嫌い」「良い男性に出会っていないだけでしょ」あるいは「バイブ使うの」「女同士でどうするの」といった、レズビアンに対する性的なイメージを抱かれることがあり、ときに恋人のいる異性愛者であれば通常は尋ねられないような内容を質問されることもあるという。Y 氏の場合は、「適当にあしらう」か「相手が思ったイメージの通りに答える」こともあるという。インタビューの手法を通じてレズビアン当事者の＜生＞を研究した掛札は、このような質問形式の会話が生じる場面には「お前には当然答える義務がある」というマイノリティに対する権力関係が生じているという。掛札は、女性間の親密な関係性が発達過程における未成熟な段階だと捉えられることや、親密な関係性のあり方が異性愛者の性的関係を前提に想定されることを検証する。もちろん、女性に性的欲望を抱く女性も存在するとはいえ、否応なしに男性が消費するポルノグラフティのイメージに還元されやすい（掛札、1992）[xxiii]。

カミングアウトするのかどうかというのは、カミングアウトできないという状況だけでなく、当事者による選択（金田、2003[xxiv]）でもあり、いずれにせよ当事者がいるということは日常的には不可視の状況に置かれやすい。レズビアンの存在がないことにされること、あるいは

過剰にイメージが先行する状況を堀江は「不承認」と「歪められた承認」の問題と分析した（堀江、2015）。このような状況下において当事者は社会の中で見えない存在となりやすく、能動的に機会を求めない限り、日常的に他の当事者と出会うことが難しい。同じ当事者とつながることもできず、ましてや身近な友人達からも孤立していたとしても気づかれにくいといえるだろう。

1-2-2.　自分自身を黙殺するということ

セクシュアルマイノリティとして生きるときの困難は、セクシュアリティが多様である以上は当然一枚岩で語ることはできない。しかし、社会生活において望ましくない経験を受けることと、そのような経験を生じさせるセクシュアルマイノリティとしての自分の＜生＞を否定する価値観を内面化するといったプロセスが、当事者にとっての「生きづらさ」として認められる。

そして「社会が許容しないあるいは許容に消極的な多様性を体現すると、人は、「逸脱」と定義され、それゆえの「生きづらさ」を経験することになり、またそれに何らかの仕方で対処していくことになる」（草柳、2004）[xxv]ときに、その対処の仕方として「生きづらさ」が生じないように振る舞うということもある。

前節では、セクシュアリティについての話題は公で語るべきものでなく私的領域に追いやられるべきだという価値観が存在することについて触れたが、日常的に接することの多い家族のような存在にこそセクシュアリティについて語ることができないというジレンマがある。家族あるいは親友に打ち明けることについて、「身近な存在だから悲しませたくない」「やっぱし怖いし」などと語る。

30 代女性の R さんは、「最近ようやく」母親と姉には自分自身のセクシュアリティについてカミングアウトしたが、父親には話すことができないでいるという。大学時代に、LGBT マーケティングの研究に取り組もうかと考えたもののカミングアウトなどのリスクを考えて断念したことも、家族との関係を考えた上での、セクシュアルマイノリティとして生きてきた中での後悔だという。仲のいい家族であり社会で働き良識的な父であるからこそ、未だに語り出すことがためらわれるという。

去年のことだけど父親とテレビを見ていた時に、NHK でそういう特集のニュースをやっていたの。あ、やってるなーって思って、一緒に見ていたんだけど。黙ってみているの。うちんち、家族で 30 分間も黙ってテレビを見ていることなんてできないの。だけど父親が、何も言わずに、もう鼻息荒くしながらニュースを見続けていて。たぶんそういうことについて、いつもなら「気持ち悪い」とか言っちゃうような人。思ったことはいっちゃうし。けど、鼻息荒くして見ているの。チャンネルをかえるわけにもいかないから、だから黙って、私も、鼻息荒くしてテレビを見続けて。もう、ずっと。（2016 年 1 月 10 日 R さんインタビュー）

かつて LGBT マーケティングの勉強をしたいと語ったことや、男性と結婚していないことなど、今までの言動が「つなぎあわさって」既に父親は自分自身のセクシュアリティについて何か感づいていそうだと言う。気持ち悪いといった否定などをせずに黙ってセクシュアルマイノリティについてのニュースを見る姿は「鼻息荒く」、それでも自分から語り出すこともできない状況に自身も「鼻息荒く」黙っていたという。

セクシュアルマイノリティ当事者は、勝手に自分たち自身についてうしろめたく考え、人に話すことのできない状況に勝手に自分自身を追い込んでしまうのだろうか。

掛札は、レズビアンが「隠れていた方が身のためだ」と考えるプロセスについて考察する。「社会では女性二人が一緒に住んだり、多少親密に行動したりすることに対して、男性がそうしている場合に比べ、格段に寛容である」が、表面上はないように見える「レズビアンへの差別と嫌悪」が一番影響をおよぼしているのは、実はレズビアン自身の心であり、「肉親をふくめ、周囲の多くの人にとても大きな嘘をつきつづけているという意識」「なにより自分自身に嘘をついているという意識」の重み、そして「自分の中にある人間への不信」になると述べる。

「自分がレズビアンであるということを、周囲に表明するのは容易ではない。その人がふだんどんなにフェアな人であっても、「同性愛」に対する感情が同じようにまともだというわけではないからだ。『この人なら大丈夫にちがいない』という期待はおうおうにして裏切られる。『私を襲わないでね』という常套句（言っている人は冗談のつもりかもしれないが）、『気持ち悪い』という反応、好奇に満ちた目、意識的にその話題を避けようとする態度、妙によそよそしく、気づかわしげな態度……、なんのために勇気を出して「自分が女性とつきあっ

ていること」を話したのだろう？（略）周囲の異性愛者の態度は、レズビアンに次のような選択をさせるに十分である。『異性愛者に言っても最初からわかってくれるはずはない。それならだれにも言わないほうがましだ。』ほんのわずかな人の反応しか見ないで絶望されては困る、と言われるだろうか。しかし、同性愛者にとってはほんのわずかなケースがあれば十分なのである。長い間、ほかの話なら包み隠さずできた「親友」に、自分が同性愛者であると告げることを決意するだけでも、実に長い時間がかかる。それに、「言おう」と思った相手は自分にとってなんの関係もない人ではなく、ほかの部分ではそれなりに仲のよかったはずの人なのだ。そうした人が「同性愛」を理由に自分から遠のいていくとしたら？」（掛札、1992：114-115）。

R さんの場合は、それでも自分自身のことを語り出すべきかもしれないという葛藤を抱えながらも、父親に対しては話せずにいる。しかし、そのような葛藤について他のレズビアン当事者の人に相談すると、ときに「わざわざそういうことを親にいうわけ？」と言われてがっかりするという。R さんにとって、セクシュアリティについて考えることは、「特別なこと」ではなく「生活」なのだという。セクシュアルマイノリティ当事者であるということが自身にとってのすべての問題というわけではなく、普段どのように感じ、どのように生きるかという問題の一部であるという。それでも、セクシュアルマイノリティであるということが、一般的には何か特別な「性の」話題として扱われ、当事者自身にとっても人に語るべきでない話題とみなされる。

その「生活」は当事者にとって、人に話してはいけないものなのだとして判断されて、次第にそれは当たり前の認識として定着していく。否定や傷つくことを恐れているから語らない、というだけではない。そもそも語るという選択や機会は与えられず、仮に弁明の機会が与えられたとしてもそれが自分の「生活」を語ることと同じだろうかという疑問がつきまとう。どれだけ信用できる友人でも、どんな偏見や邪推が働くかはわからない、そもそも自分の考え方がおかしいのかもしれない―身近な他人との関係性を考えるほどに、当事者にとっては語らないことが優先される。自分自身の経験や感情といった「生活」について、自ら黙殺せざるを得ない構造が存在し、その孤立が気づかれることはない。

1-3. 小括 ―本研究の目的

ケアを必要とするようなセクシュアルマイノリティの生きづらさの問題を、社会から不可視の存在として痛みを受けるという点だけでなく、そのような価値観を内面化させて自ら自尊感

情を削り続けるような自分に対する不可視感、そのような状況下にある当事者の「不確かなセクシュアリティ」の問題と位置付ける。特に見えないとされるレズビアン・バイセクシュアル女性がどのようなケアを求めて自分自身の存在を確認していくのかを明らかにすることとなる。その際には、セクシュアルマイノリティとして生きる際の困難を、クィアとして同性愛と異性愛といった二項対立をずらす攪乱ではなく、あえてセクシュアルマイノリティ女性というジェンダー性、すなわち一枚岩に語られがちな「セクシュアルマイノリティ」内における、マイノリティ性に注目することで、異性愛主義や男性中心主義といった規範の作用と、それによって自明のものとしては確立しないセクシュアリティの困難について照射したい。当事者のセクシュアリティは、繰り返される自問により確立しづらく自己疎外を続ける。ケアとは、誰しもが受ける他者への配慮であった。それであれば、不確かなセクシュアリティとともにある当事者の＜生＞が黙殺されないためのケアのありかたを見出すことは可能だろうし、このケアについての検討を進めることが本研究の目的となる。

2. 研究手法・分析視点

2-1. 研究手法

本研究では、セクシュアルマイノリティ当事者が参加する活動、特に東京都中野区で活動する、セクシュアルマイノリティ女性のための LOUD が取り組む「オープンデー」を中心に、定性的方法を用いて調査を行う。各種の活動および「オープンデー」において記録をつけた調査期間は、2015 年 5 月から 2016 年 1 月である。「調査者が対象者の生活する社会や集団に参加し」「彼らの視点から対象社会の構造や対象者の解釈過程を観察しようとする方法」（北沢・古賀、1997）[xxvi]としての、参与観察[14]を研究手法として用いる。この方法は、第三者として調査対象について観察するだけでなく、ときに活動の参加者として情報を記録し、フィールド調査を進める。この際には、「五感を通じて」、たとえば現場の視覚的な情報等も記録することがある（佐藤、1998）[xxvii]。また、予めいくつかの質問項目を定めて実施するフォーマル・

[14] 研究対象となる社会に一員として参加する、というとき、本論においては必ずしも LOUD のみを対象としない。筆者は 2009 年以降、日本における同性愛受容についてのレポートを作成する他、いくつかの社会活動や当事者コミュニティにおいて、セクシュアル・マイノリティ当事者らの話を聞いてきていた。それらについては、本研究ではデータとして扱わないものの、このような背景を鑑みると、参与観察という研究手法であったと判断できる。

インタビューの他に、調査対象の場でのコミュニケーションや即興的な質疑応答を含めたインフォーマル・インタビューも調査結果として扱う。特に個人のライフヒストリーや私的な発言がされる本研究対象の現場においては、研究対象との関係にまつわる倫理や手続きとして、クィア領域におけるガイドライン試案（溝口、2014）[xxviii]の議論の内容について注意を払いたい。研究の社会的・学問的な意義を見出し公表前に内容確認を依頼すること、調査・取材対象者への予期せぬ心身のダメージの可能性に気を付けること、調査者が当事者であることを利用して調査対象者の信用を得ようとしていないか気を配ること、カミングアウトを含めた情報の匿名性の扱いを確認すること等である。

2-2. 分析視点

本研究の対象となるケアのあり方を観察するにあたり、セクシュアルマイノリティ当事者が当事者のコミュニティにおいて獲得していく「アイデンティティ」という概念を分析視点とする。「日常語として使われる＜アイデンティティ＞は＜生＞の意味を模索し、存在を確かめようとする”わたし”と”あなた”の関係性のなかで、ときには、共通項をもつ集合的な”わたしたち”をみいだそうとするプロセスを表す言葉でもある。」（堀江、2015）。

2-2-1. アイデンティティとスティグマの視点

本項目では、孤立化を防ぐことと思われる、他者との関係性を獲得するプロセスを分析する上に必要な視点として、「アイデンティティ」の概念を採択する。

アイデンティティを巡る議論は一時期社会学において隆盛した。賞味切れの議論として論じられる側面もある。（上野、2005）それはアイデンティティの発想が、帰属の危機から生じたものであり、普遍的な自己同一性ではなくむしろ発明される努力目標とされ、「永遠の一時性」をもつ「未完の作業」（バウマン、2007）[xxix]だと解明されたことによる。だからといって現実の生活場面においてあらゆる人からアイデンティティの問題への関心が失われたとは言い難い。

性的マイノリティとしてのアイデンティティが、他者との関係における孤立化につながるような生きづらさとなるのは、それが負のレッテルとなるからであると論じられることが多い。ゴッフマン（1970）はスティグマを「人の信頼をひどく傷つけるような属性をいい表すために用いられるが、本当に必要なのは明らかに、属性ではなく関係を表現する言葉」だと解釈し、「出会いを機に具体的に作用することになる未だ現実化していない基準によって、さまざまの

社会場面で、両者が接触する間に算出される」ような「視点」だと定義づける。ここでゴッフマンは、社会的アイデンティティという概念を用いてスティグマの成立過程を考察し、個人的アイデンティティという概念を用いて、我々がスティグマ処理に際してどういう役割を果たしているか考察した。性的マイノリティとしてのアイデンティティが持つ負のレッテルが、他者を前にした経験から相互作用的に形成されるゴッフマンのいうスティグマと捉えることができる。そのとき、このスティグマの構造を解明する上でも、アイデンティティは鍵となる概念であった。もちろん、自己の一要素にすぎないセクシュアリティがアイデンティティを規定する発想を批判する立場もある。また、スティグマとなるアイデンティティを積極的に表象するようなカミングアウトや社会運動はゴッフマンの想定する人間像とは異なる。しかし性的マイノリティとしてのアイデンティティが社会的なイメージとして押し付けられること、同時にこれをスティグマとして管理する当事者の多さを考えると、孤立の問題と不可分な概念だと言えよう。

レイン（1971）は、ひとがひとりの人間として他の人間にかかわりをもつために求められるものが、自己の自律的なアイデンティティであると述べる。さもなければ、いかなる関係においても「呑み込まれる」ようにアイデンティティの喪失のおそれに晒されるという。

これまでの先行研究の部分的な概観からわかることは、アイデンティティが個として自立した輪郭を描こうとする働きと同時に、人と人の関係性を紡ぐ実践性の両義性から成り立つという概念だろう。

2-2-2.　本論が依拠するアイデンティティ論

本論においては、特に後者の流動的な関係性を捉えようとするために、アイデンティティが語られる場の権力関係に問題提起したバトラー（1993）によるアイデンティティ論の展開に着目したい。彼女は、どのような場面において人のジェンダー・アイデンティティが他者からみなされるのかに注意を払い、永続的な自己同一性としての概念が終焉したことを指摘する。その上でアイデンティティとはあくまで言説実践の効果であり、主体に所与のものではないことを論じる。すなわち身体的性に基づくとされるアイデンティティでさえ自明のものではなく、ジェンダー規範に則る行為が表明されることで身体的な性が他者から認識される構造によるものであると述べる（Butler、1990）[xxx]。バトラーのアイデンティティの実践性についての考察は、個人のセクシュアリティとジェンダーに限らず、前述のゲイ・コミュニティとレズビアン・コミュニティの分析にも用いられている。それは、あるアイデンティティを持つ主体がど

のような存在として他者（コミュニティ分析においては参加者）と関わり、どのような変容を遂げるのか観察する上で重要な観点であるからだろう。本論で扱う事例で見られるような、性的マイノリティとして他者と関わる際に生じる自分自身や他者への葛藤は、明確な原因により定型化された問題であるというより対峙する相手や場面に応じた振る舞いや関係性において、都度生成される。そして、そこにケアが存在するとすれば、そのケアもまた、当事者の語りによる実践性としてのアイデンティティに対してなされると思われる。同時に、痛みに閉じ込められた「孤立」から、「孤立」していない状況への変容は、おそらく一度限りの解決にはみられないものであり、連続的なプロセスになるという仮説をもって分析に臨むべきだろう。

再びレインの論を参照すれば、アイデンティティと孤立／他者との関わり、については以下のように語られる。「呑みこまれるおそろしさの圧迫のもとにあって、アイデンティティを維持するためにつかわれる主な策略は孤立である。それゆえ、個人的の自立性にもとづく「自立」と「かかわり」という両極のかわりに、ここでは他者に吸収されることによる完全な存在の喪失（呑みこみ）と完全な孤独（孤立）という対立が生じる（p52）」。揺らぐアイデンティティを持つ者にとって、他者との関わりそのものが脅威となり、結果として自ら孤立を選択するという状況が起こりうる。ときにリベラリズムの背景が強調されるとき、アイデンティティの承認が「命にかかわる人間にとってのニーズ」としても検討される（岡野、2006）[xxxi]。このことから、スティグマと、それによる孤立やケアがどのようなものであるかを考察する上でも、「アイデンティティ」という視点は分析に有用だろう。

3. 研究構成

Ⅰ章「問題の所在」では、セクシュアルマイノリティをめぐる一般的な社会状況や関心について概観し、メディアで顕在化するイメージとは別のセクシュアルマイノリティ当事者が存在することを示した。Ⅱ章「本研究の目的と構成」では、本研究が扱うセクシュアルマイノリティや特にレズビアンやバイセクシュアルといったセクシュアルマイノリティ女性が置かれた社会的な状況と困難について説明した上で、社会からの否定だけでなく、自らの不確かなセクシュアリティに対する不可視に注目した。そのような当事者の＜生＞にどのようなケアがされるのかについて分析するという目的、参与観察という研究手法や、他者との関係性としてのスティグマという分析視点を示した。

Ⅲ章「セクシュアルマイノリティ女性のためのスペース LOUD」では、LOUD の活動背景やオープンデーの取り組みについて概観し、Ⅳ章「LOUD オープンデーの役割」において参加

者へのインタビュー及びアンケートを分析した。そして＜開かれた＞場という LOUD の特徴を分析する。Ⅴ章「考察」では、LOUD のオープンデーが提供しようとしているケアと、参加者がオープンデーの場に求めたものを双方から照合しつつ、＜開かれた＞場が、不確かなセクシュアリティへのケアとなる可能性を考察する。

なお、本文中においてインタビュー等の話し言葉の直接引用については「」または、斜字で示す。

4. 用語の定義

4-1. 「セクシュアルマイノリティ」「当事者」の定義

本論においてレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーといった性的指向と性自認における少数者を「セクシュアルマイノリティ」と表記する。マイノリティという表現には、数としての少数者に限らず、社会的な被差別的な状況下に置かれていることを含意する。セクシュアルマイノリティ（sexual minority）ないし訳語に相当する性的マイノリティという言葉は、合衆国において学問的分析を行う場面において使われる表現であり、レズビアン／ゲイ・コミュニティではあまり使われている表現ではないが、当事者らの間では「セクマイ」と略されることがある。

近年では LGBT（Lesbian ,Gay, Bisexual ,Transgender）や、これに非当事者の支援者の Ally または無性愛者 Asexual の頭文字を加えた LGBTA などの表現も使われるが、LGBT ないし LGBTA 以外のカテゴリに相当するセクシュアルマイノリティの多様性を表せない恐れがある。また、ネガティヴなイメージを持たない中立的な表現としては 2006 年以降に国際連合の政府間ワーキンググループで社会的な人権問題の課題として取り上げられた SOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）という表現もあるが、日本国内では十分に認知されていないとされる。よって本稿では「セクシュアルマイノリティ」と表記する。

また、「当事者」という用語については、本人にしか知りえない個別性・排他性の協調と、ある問題や経験へのニーズの共通性を提示すること、客観性や専門性を相対化する自己決定権を要求する（野崎、2004）[xxxii]という特徴から定義する。すなわち、セクシュアルマイノリティ「当事者」という語は、セクシュアルマイノリティであるという何らかの経験に基づいた自分自身の定義を持った体験者を指す。「利害関係者」ではなく、「当事者」という語を用いる

のは、ある問題や経験に対して自らが何者であるかというアイデンティティの定義への要求を、本研究では重視しているからとなる。

4-2. 各種用語の定義

文中で使用されるいくつかの用語について定義づけする。説明にあたり、数多くの言語に翻訳されたヴァネッサ・ベアードの書籍[xxxiii]および、ケリー・ヒューゲルの書籍[xxxiv]を中心に、引用・編集した。

セックス：身体と関係する生物学上の性。たとえば、女性、男性、インターセクシュアル。

ジェンダー：社会における姿。たとえば、女、男、トランスジェンダーあるいはトランスパーソン。

セクシュアリティ：欲望と指向とに関わっている。たとえば、ヘテロセクシュアル、ホモセクシュアル、バイセクシュアル（ヴァネッサ、2005）。あるいは、性をめぐる欲望と観念の集合体という文化的な概念。フェミニズムでは、親密さと性的欲望の同一視、挿入を伴うセックスだけが「個人」と「個人」のあいだのもっとも「親密」とされる特権的な関係であるという近代のあり方を問い直してきていた（上野、1995）[xxxv]。

性的指向：本章の引用の図中、「スキになる性」。どちらの性別（もしくは両方、両方ナシ）を性的対象とするか、ということ。

性自認：本章の引用の図中、「ココロの性」。自分は男性である、あるいは女性である、という内なる感覚。

ストレート（②⑩）：異性愛者。

クィア：「普通でない」という意味で、性的指向やジェンダー・アイデンティティが「ヘテロセクシュアリティ」という標準に反している人びとを包括的に指す。LGBT やレズビゲイ（lesbigay）とほぼ同義語。

レズビアン：女性に心と体が惹かれる女性。

ゲイ：英語ではホモセクシュアルの男性とレズビアンの女性の両方を指すこともある。男性を指す場合は男性に心を体が惹かれる男性をゲイと言います。ゲイがホモセクシュアルの男性の意味で広く使われるようになったのは、1950 年頃から。

バイセクシュアル：男性、女性の両方に、心と体が惹かれる人。

クエスチョニング：（またはクエスチョン）まだ自分の性的指向や性自認がはっきりしていない人。

クローゼット：自分の性的指向や性自認を明らかにしない人を、「クローゼット（押入れに入っている人）」と言う。限られた相手にだけカミングアウトする、部分的なクローゼットの人もいる。

アセクシュアル：男性にも女性にも性愛の感情を持たない人。

トランスジェンダー：肉体的に女あるいは男でありながら、自分のジェンダーに違和感をもつ人々を広義の「トランスジェンダー」（または「**トランス**」）という。このうち肉体（性器）に対して違和感が強い場合は「トランスセクシュアル」、肉体よりも社会的に反対の性として生きることを選択した場合は狭義の「トランスジェンダー」、服装や外見を反対の性にしようとする場合は「トランスヴェスタイト」という。こうした違和感をもつ人々が治療を必要とする場合、診断名を「性同一性障害」（ＧＩＤ）という。（トランスは④⑤⑥⑦⑧⑨）

ＭＴＦ：男性から女性に移行したトランスセクシュアル

ＦＴＭ：女性から男性に移行したトランスセクシュアル

ＳＲＳ：“Sex Reassignment Surgery”の略。性別適合手術。内外性器に関する手術。

Ｘジェンダー：”gender queer”に相する。男性・女性、いずれでもないジェンダー。

インターセクシュアル：遺伝子変異の場合も含めて男女の区別がはっきりしない人々のこと。日本では伝統的に半陰陽者とか間性と称してきた。

インターセックス：ＩＳと略されることもある。いわゆる染色体「異常」や、内性器や外性器の分化「異常」、ホルモン「異常」などの器質的原因により男性／女性への同定が困難であったり、ジェンダー・アイデンティティと戸籍等の社会的性別に不一致がある人。

ポリアモリー：親密な関係性が、一人の相手だけでなく、複数に開かれている可能性がある人。三人を最小単位とした誠実な関係性（深海、2010）[xxxvi]。

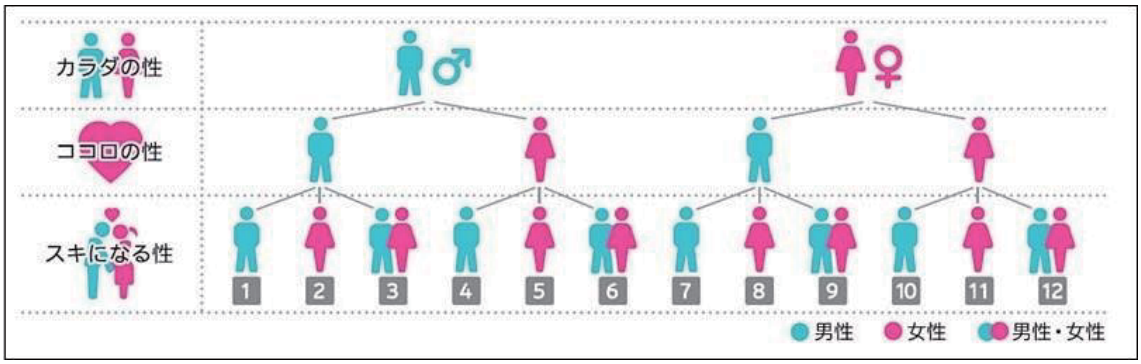

図１、セクシュアリティについて、出典：電通ダイバーシティラボ「MEET LGBT」

Ⅲ　セクシュアルマイノリティ女性のためのスペース LOUD

1.　LOUD の概観

本研究では、レズビアン・バイセクシュアル女性のためのスペース LOUD や、LOUD「オープンデー」で交わされる、オープンデーの空間やスタッフおよび参加者の交流から、セクシュアルマイノリティとして生きるためのケアについて考察する。これにあたり、本章（Ⅲ-1.）では LOUD の概観を、活動概要・歴史的背景・地理的背景から分析し、次章（Ⅲ-2.）ではインタビューをふまえて運営上の理念を特徴づける。

1-1.　活動概要

LOUD（Lesbians of Undeniable Drive）は 1995 年 6 月に中野区のマンションの一室に、レズビアン当事者らによって創立された「レズビアンとバイセクシュアルの女性のための開かれた活動場所」である。”LOUD MINORITY”といった言葉から、”社会に対して発言する”女たちの場所、という意味を持ち、社会に性差別がある中であえてセクシュアリティにこだわるスタンスをとることを表明している。

LOUD のホームページ「About」には、LOUD について下記のように説明している。

> LOUD はレズビアンやバイセクシュアルの女性のためのコミュニティです。
> 個人のセクシュアリティが多様であるのは当然ではありますが、現在の社会は、こと“性の問題”に関しては閉鎖的で、異性愛がごく当たり前の通念とされています。同性愛に対する偏見や無理解、無関心により、女性、特にセクシュアルマイノリティ女性が、まだまだ生きにくい状況下にあります。そのため LOUD は“あえてセクシュアリティにこだわる”立場を設立当初から、一貫して通してきました。私達の社会には異性愛者だけでなく、たくさんの同性愛者や両性愛者が存在していることをきちんと表明していくためです。これは LOUD というコミュニティの重要な役割のひとつであると考えます。
> 個人の様々な生き方が尊重され、セクシュアリティによって差別されたり、不利益を被ることのない、真の意味で寛容な成熟した社会になるまでは、この姿勢を変えることはありませ

ん。今後ともセクシュアリティを越えて、多くのみなさまからのご支持、ご支援を賜りたく、どうぞよろしくお願い致します。（LOUD ウェブサイト　http://space-loud.org/）

現在 LOUD は、設立当初より LOUD の活動に参加や手伝いを行ってきていた３名のスタッフを中心に、「手弁当」のボランタリーベースで運営されている。創設時のスタッフから現在のメンバーは異なるが、それぞれの事情や仕事などを鑑みて、自身の生活と両立できるところで運営が続けられてきた。三名のスタッフはそれぞれ日中には性的マイノリティにかかわる活動と別の仕事を持ちながら、LOUD 創設初期のころから LOUD の活動への参加や手伝いの経験がある。代表の O 氏は、設立当初から LOUD の活動に参加し、中野 LGBT にじいろ共同代表を務めるほか、LGBT 法連合などにも参画している。

LOUD の活動としては、LOUD スタッフによるオープンデーとキャンドルナイトという開放日のイベントが行われる。誰でも参加ができるオープンデーに対して、カクテルが提供されるキャンドルナイトは「女性」のみが参加できる。その他の LOUD の活動は、団体やグループの拠点としてミーティングやオフ会に利用できるスペースの貸出、メールボックスの貸出を行っている。他、書籍の貸出・販売、グッズ販売も行われている。運営費は、スペースの利用費や維持会員制度の年間費用（１口 5000 円）で賄われており、年に 4～6 回活動や会計の報告のための LOUDNEWS が維持会員宛に発送される。

以下は、LOUD で行われる活動の一覧と概要である。

主催者	類型	参加資格	概要	活動頻度
LOUD スタッフ	オープンデー	LOUD の活動に理解のある方は誰でも	参加費 700 円（１ドリンク、お菓子つき）	毎月１回（第２日曜日）
	キャンドルナイト	活動趣旨に適すること（大人の女性）	参加費 1500 円（１ドリンク、おつまみつき）	毎月１回（第４土曜日）

団体会員	オープン利用	活動趣旨に適すること	LOUD ウェブサイト等で広報される、各団体によるワークショップや交流会等	利用団体による。月 1〜2 回程度
	クローズド利用	団体関係者	団体活動のミーティング等に利用される。詳細な情報は公開されない	利用団体による。
団体／個人会員	メールボックス	特になし	利用費を払うことで私書箱のように LOUD 住所を利用できる	現在は利用者無

表１、LOUD で行われる活動の例、筆者作成

現在の団体利用の内訳は、レズビアン小説翻訳ワークショップ、医療・福祉関係のレズビアン＆ゲイのネットワーク、英会話クラスなどであり、グループとして定期的あるいは単発でスペースを利用している。1 日を午前・午後・夜間の 3 ゾーンに分けて利用を受け付けし、料金はひと枠、土日祝日は維持会員 2500 円、一般 3500 円、平日は維持会員 1500 円、一般 2500 円と、都心部の有料会議室と比較してやや安価な価格設定とされている。クローズドではない活動については、LOUD のニューズマガジンやウェブページで紹介されることもある。

以下は、LOUD を利用している、公開された活動の例である。

団体名	概要	各回の参加人数	活動頻度
れ組	女性同士の交流の場	５〜10 名	月１回
英会話寺子屋	セクシュアリティに関する題材で英会話	4 名前後	月１〜２回

レズビアン小説翻訳ワークショップ	英語圏のレズビアン文化の作品を翻訳する 21 年続くワークショップ	正会員＋随時見学者	月 1 回
Reseratten 本読むネズミたち	LOUD に所蔵された日本国内の LGBTA 文献を読む	数名	月 1 回

表 2 、LOUD スペース利用団体の例、筆者作成

また、月額 1000 円で、LOUD 住所のメールボックスを使用して郵便物を受け取ることができる。これは団体窓口の住所が必要な場合や、活動家としての窓口、文通が盛んな時代に家族に見られることなく手紙を受け取るといったニーズに応えてきたという。

他、LOUD が開設しているライブラリコーナーにはレズビアン、ゲイ、トランスジェンダーなどのセックス／ジェンダー、ライフスタイル、文学、アートなどに関する国内外の書籍、雑誌、ミニコミ、同人誌、コミック等の蔵書がある。これは維持会員であれば 2 か月間、3 冊まで借りることができる。また、LOUD に来訪した人はだれでも閲覧自由である。

室内のコルクボードにはアクセサリなどが掲げられている。この「キオスク」には、オリジナルグッズやレインボーグッズ、ストラップやブレスレット、レインボーのカップコースターなどが販売されておりスタッフは「賑やかしで」と述べる。グッズやステッカーなど、このような手作りグッズの販売は、近年ではどの性的マイノリティ活動でも行われているが、取り組み始めたのは LOUD が初めてだったといい、パレードや映画祭などでブース出展した際にグッズづくりをした話が重ねて語られる。

みんなほら、お店をやっているような人たちが、海外からのものを輸入して高いものを売ったりはしていたんですけれども、もっと自分たちの手で作ったりしてみんなが手に取れるような、パレードや映画祭を楽しめるような。夜なべしたりしてほんとに安価なものを作ったら、飛ぶようにして売れましたね。…（中略）…やっぱり、女子ならでの目線だよね。こういうの身に着けてパレードあるきたいとか。こういうのつけて差別化したいとか、けど可愛いものがいいよね、とか。それの名残なんですよ。

（8 月 25 日 O 氏インタビュー）

かわいいグッズを楽しんで作り売ることについて、「これはもう、女子力」と説明する。キオスクの手作りグッズに見られるような、新しい活動を取り入れていく姿勢は、「自分たちでつくってきた」LOUD の設立の背景と重なるところがある。

1-2. 歴史的背景

セクシュアルマイノリティの社会的な活動のうち、ゲイ解放運動の流れとは別に、レズビアン女性によるミニコミ誌を通じた活動があった。セクシュアルマイノリティ女性らは、セクシュアルマイノリティであるという共通意識をもとにゲイを中心としたパレードやエイズをめぐる社会運動に関わる時期が存在したが、本節では女性ジェンダーが意識されつつもセクシュアルマイノリティ女性当事者としての活動であることを意識しつつ、歴史的背景をみてみたい。

1-2-1. 1990 年当時の「女性」とレズビアンの活動

LOUD は 1995 年に 3 名のレズビアン女性によって設立された。設立メンバー及び、当初の運営スタッフの多くは、LABRYS というミニコミ誌を発行するメンバー有志らであった。LOUD の設立が求められた背景を理解するために、当時「レズビアン」が政治的にどのような活動に参画していたのかについて言及したい。

1970 年代は、1960 年代の新左翼運動の流れを受け継ぐ「女性解放運動」と呼ばれたウーマン・リブが盛んな時期であり、新左翼運動においては、社会的権利の主張や平等思想、強圧的な権力行使への抗議、個人を重要視するカウンター・カルチャーの思想が掲げられ、これに多くの女性が共感し運動に参加した。一般的にウーマン・リブは 1960 年代アメリカで始まった女性解放運動を指す。しかし日本のフェミニズムは近代批判として成立し、男女雇用機会均等法への反対につながるヨーロッパのフェミニズム思想と共通性を持つ。本論では、日本における 1970 年以降の「ぐるーぷ闘うおんな」などの女性グループによるデモや、以後開催される会議などによる第一波フェミニズムの社会運動の総称とする（上野、2009）[xxxvii]。

しかし、そうした運動や思想の中でさえ性差別が存在した。これに失望した女たちによって「ぐるーぷ闘う女」等の小規模な運動体がいくつも結成されはじめ、性の抑圧に対する根本的

な問題提起がなされるようになったという背景をもつ。また、1960 年代から 1970 年代にかけて米国で高揚した女性解放運動の影響もまた、日本国内のレズビアン・コミュニティのありかたに影響を及ぼした。

日本でレズビアン・コミュニティの存在が初めて確認できるのは、1971 年の「若草の会」となる。鈴木道子らにより定期的な茶話会が開催され、主に女性同士が出会うことのできる「安全な」場を提供することが目的で実施された。入会希望者には自ら面接を行い、会員の選抜を行っていた。女性がセクシュアリティについて語る機会が限られており、レズビアンであると知られることに不安や恐れを感じていた女性が多かったこの時期、「レズビアンとして」出会い交流できる場が誕生し、参加者が自分以外のレズビアンと出会う場が創出された。この「若草の会」での交流を契機にいくつかの新しいグループなども生じたという。

レズビアンとフェミニストを繋ごうとする動き「ラデイカレズビアンズ」というレズビアンフェミニストのグループの「『女に同一化する女』による宣言文」では「レズビアンであること」を「爆発点にまで達したすべての女のたちの怒り」と定義し、これは「レズビアン宣言」と題されて『ザ・ダイク』というミニコミ誌によって日本のレズビアン・フェミニストたちに紹介された。

そして 1970 年代後半になると、「レズビアン・フェミニスト」のグループが活動を展開する。「レズビアン・フェミニスト」とは「女性に対する差別とレズビアンに対する差別が密接な関係にあることを指摘し、主に女性解放の視点からレズビアンのアクティヴィズムを展開しようとしたレズビアンたち」を指す（飯野、2008）[xxxviii]ようになった。「男のような女」「男になりたい女」ジェンダーの倒錯として理解されることが多く、この理解のもとに差別が正当化されていた。これが、女性たちの間の共感や連帯を表すものとして書き換えられるようになり、「レズビアンであること」を「究極のフェミニズム」を生きる＜わたしたち＞と同一の広がりを持つものとして捉える思想が生じた。

掛札はウーマン・リブ以降の世代のレズビアンたちについて、「『レズビアン』にまとわりついてきたマイナスのイメージを払い落とすためには一役かってきたかもしれない。」と称する。「フェミニズムへの共感や「女嫌いの社会」への抵抗と「レズビアンであること」を結びつけることで、あたかも『レズビアンであること』に一定の原因があるかのような印象を社会に流し、レズビアンを『男嫌い』にしたてたがっている人々を逆に利する」戦略を取ってきたという（掛札 1992）[xxxix]。

レズビアン間のコミュニティのいくつかは、そのような政治的な主張を色濃く受け継ぎ、それは日常的なふるまいや外見にも表れることがあった。個人的なことは政治的なことであるというフェミニズムの思想をもとに、例えば短髪でデニムのボーイッシュあるいはオーガニックな服装をするといった生活様式がみられたという。

しかし、ウーマン・リブやその後のフェミニズムを経験しない次世代のレズビアンにとっては、「いかにも」レズビアンである服装などが強要される風潮は違和感を生じさせるものであったという。「歯ブラシもパンツも共有」するような活動をするウーマン・リブ世代にも、麻などのナチュラル志向な服装を良しとするフェミニズムのありかたも、「化粧や長い髪を自分のおしゃれとしてしている自分」の私らしさとは合致しないと感じるレズビアンの存在が見られるようになったという。そして同時期になるとレズビアンをめぐる議論として、社会構築主義の思想の影響を受けたフェミニズム批評やクィア理論などのアカデミズムは、「「レズビアンであること」と女性間の共感や連帯とは、重なるところがあるとはいえ全く同じではないが、「レズビアンならフェミニストでなければならない」といった規範的に働いてしまう」ような点を指摘するようになった。

LOUD の創設メンバーらは、一度以上はウーマン・リブを経験したレズビアンのいるコミュニティに関わることがあったし、これまでのフェミニズムが掲げてきたジェンダーへの問題意識にも関心を持っていた。そこで、ゲイ・リブ運動とは別に「女性のための」場の必要性が求められた。

1-2-2. セクシュアルマイノリティ当事者としての活動をめぐる状況

そしてまた LOUD の創設メンバーは LABRYS というレズビアン・バイセクシュアル当事者のためのミニコミ誌制作メンバーであり、具体個別のレズビアンの生活上の問題や出会いの機会について扱ってきた。1990 年代初頭は「府中青年の家事件」において性的マイノリティ当事者が公共施設利用にあたって不当に差別された事件について裁判が行われていたように、性的マイノリティ当事者がセクシュアリティについて安心して活動することは難しかった。公共施設を利用しようとすると、周りの目が気になったり、時間の制限があったりと、活動に制約が生じる。このような背景の下、LABRYS というミニコミ誌発刊をしているメンバーらが、まさに自分たちの活動を含め、安心して活動できる場所が必要と感じ、LOUD の発足を計画した。LABRYS は「レズビアンとバイセクシュアル女性のためのミニコミ」である。発行者のうちの一人の自宅に集い、「わいわいと活気がある雰囲気で」毎回 1000 以上のオフセット印刷のミ

ニコミ誌を手作業で編集・発送していたという。1992 年から 1995 年 10 月までの 3 年間、通算で 2300 人の読者を持ち、1992 年 7 月には一般向け雑誌『別冊・宝島　ゲイの贈り物』が出版された際に誌面に情報が取り上げられるほど、規模の大きいミニコミ誌の一つであった。「情報ラブリス」のコーナーでは文通欄を通じて当事者間の交流があったり、政治・映画・芸術・海外のレズビアン事情といったコラムが執筆された。LABRYS の最終号[15]で、編者の一人である藤掛は以下のように記述している。「『LABRYS』の役目はとりあえずおわったのだと感じています。…もう『私たち』という言葉で…日本のレズビアンやバイセクシュアル女性をくくることはできなくなった、ということです。…これから必要とされるのは『差異』を強調し、それによって逆にレズビアンやバイセクシュアル女性が力を持てるようになる、そんなミニコミやグループではないでしょうか。」ここからは、レズビアンやバイセクシュアル女性の存在が一枚岩でないことを改めて確認する文意が読み取れる。このように LABRYS は顔の見える関係と実存する場所を求めて、終了する。それはミニコミ誌があくまで当事者だけのネットワークであり社会からは見えない、存在しないものとして扱われていたという状況に対する、問題意識と実践であった。ミニコミ誌上で交流し、活動していた当事者が、会員制の誌面内に限らず実際に姿を現して社会的な活動を行っていくことは、その存在を表明する意味で「社会に声をあげる」契機となったと言えるだろう。ただし LOUD は、一人一人の「差異」を強調するという点で、従来のレズビアン・バイセクシュアルの集まりとは異なった性的マイノリティ女性のための活動を目指そうとした。

1-2-3. LOUD 創設及び運営時の課題

拠点としての部屋を借りるにあたっては、活動内容の面からも大家を説得して契約することが困難な時代背景であったものの、ウーマンリブの活動家の助力を得ることで解決する。事務所は中野区で男女共同参画を進める、区議会議員 S 氏の事務所として利用しているマンションの一室に空きがでるということで、譲ってもらったという。S 氏は女性議員であり、フェミニ

---

[15] その後、LABRYS・DASH が発行される。このミニコミ誌が終了する際は「7 割がインターネットにアクセスできるからといって、後の 3 割を切り捨てていいのか、それは、マイノリティのマイノリティ差別に他ならないのでは。」といった声が読者から寄せられたと書かれており、それに対して編集者はキャパオーバーだとも述べている。当時のミニコミ誌発行者は、それぞれ日常的な仕事や活動と並行してミニコミ発行をしていた。

ストの活動家の女性が手伝いをしており、当時著名なウーマン・リブの運動家の一人が LOUD の活動に理解を示し仲立ちして事務所を借りてくれたという。

しかし運営開始直後より度重なる経済危機に襲われる。具体的にはボランタリーベースのため維持運営の経済的な困難に幾度も遭遇する。発足時の維持会員制度から改め、新・維持会員制がスタートする。これが現在の維持会員制度となる、年会費一口 5000 円で LOUD をサポートする会員になることで、LOUD の維持運営に協力する仕組みである。当時の LOUDNEWS によれば、維持会員になる場合は LOUDNEWS を受け取ることができるほか、キャンドルナイトとオープンデイの無料招待券 1 枚を得られるという。結果として資金繰りの問題は解決された。そしてこのような制度の導入は、実際的な場所代としての利用ニーズ以上に LOUD の維持運営への賛同者が LOUD 運営に大きく助力していることを明らかにした。会員募集をした直後、翌月には 39 名（48 口）が維持会員に申し込みをした。また翌月には更に 78 名（119 口）が申し込みを行った。これによって運営者らは 2000 年 4 月以降の LOUD 存続について“継続できる”と会議で判断した。

その後も LOUD は運営上の資金繰りの問題に直面する。一つの解決策として、中野区で実施されていた東京ゲイ・レズビアン映画祭の事務所としての場所提供を行った。LOUD のスペースを、機材や書類などを置く場所として共有し、代わりに家賃負担を依頼する約束で、2008 年まで続けられた。

2009 年 4 月末日に物件所有者都合により 13 年続いていた賃貸契約の終了が決まり、LOUD は改めてスペースを探すこととなる。新規の賃貸物件を探す際も、団体活動内容を公言していたためか、空き部屋を見つけても契約に至らない場合もあったが、仲介担当者の女性の尽力により現在の一室を借りることができた。2008 年頃の会報誌、LOUDNEWS を見ると「がんばれがんばれ LOUD」「LOUD を守っていこー！」といったイラストつきの表紙が見られる。このときも会員らからの自発的な引越し資金カンパを募ることで、入居の契約と運営が続けられた。カンパの賛

図 2、LOUDNEWS の表紙

同者は必ずしも毎回 LOUD に参加するとは限らず、利用をしなくても LOUD という場を守りたいという賛同者からも支援を受けた。

1-3. 地理的背景

LOUD は設立当初から、2006 年の引っ越し時まで、拠点を中野区に置き続けている。中野区という地域としての特徴となる、性的マイノリティ当事者への制度や位置づけについて、LOUD の活動との関連がみられる。

中野区は昼間人口が夜間人口より少なく、住宅地として発達し、中野駅前の商店街である中野ブロードウェイでは様々なサブカルチャーが発達してきた。20 代前半の同性パートナーを持つ女性からは、コスプレ文化に抵抗が無い街だから居心地がいいかもしれないのだという語りもみられた。実際、1992 年には、中野区中野サンプラザの研修室で、セクシュアルマイノリティのための国際的な映画祭である東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭が開かれている。このときの経緯のように文化や芸術の多様性という側面から、性的マイノリティの存在が受容される側面もあると考えられる。

また、ゲイやレズビアン当事者の間では、性的マイノリティ当事者が多く住んでいる地域だといわれることがある。国勢調査や公式の調査では、そもそも性別欄が男女しかないことや質問項目が設定されていないことから明らかにはされていない。しかし、中野区は新宿区と隣接しており、ゲイ／レズビアンバーやクラブイベントが開催される「新宿二丁目」と近いことから、中野区にも当事者のコミュニティとなるような場所ができてきたと言われる。本稿で扱う、レズビアン・バイセクシュアル女性のためのコミュニティ「LOUD」や既出の「動くゲイとレズビアンの会（OCCUR）」事務所、「スクウ」「シニカルボンド」「ZATTA」「Proud」といったバーなどがある。「新宿二丁目」は店主やスタッフが性的マイノリティ当事者であるようなバーが存在し観光地として扱われることもあるように、一般には性的マイノリティ当事者達の集う代表的な盛り場としてのイメージが語られる。2000 年代以降、日中も開かれている CoCoLo café のような店舗がオープンするが「ナイトスポット」としての印象は強く、当事者が昼間生活する場所とは言いがたい。この新宿二丁目のような盛り場への反発を含

み持ったゲイ・リブ[16]活動として「動くゲイとレズビアンの会」は、意識的にコミュニティを形成していくにあたり中野区を拠点として活動を行ったという。アカーでは 1992 年の総会で「アカー・ゲイ・コミュニティ・プラン（OGCP）ガイドライン」という、ネットワークづくりと社会的支援を目的とした方針を提起した。そして「OGCP ガイドライン九三年版」がスタートしてから二年後の年間総会報告集には以下のような記述が見られる。

> 九三年版ガイドラインには、三つの目標が掲げられました。
>
> 第一点は、「中野区に、より多くの同性愛者が居住する」です。これは、みずからの生を「夜の繁華街」のみに限定されることをこばみ、同性愛者としての別の（オルタナティブな）生き方を模索する意志を表明したものでした。
>
> 「集住する同性愛者の力を背景に、区内各領域への参入をはかる」が二つ目の目標でした。同性愛者自身の訴えかけによる社会変革の志向を言明したものです。
>
> そして第三点として、こうした活動をとおして、「同性愛者への具体的な利益誘致を図る」ことがめざされました。（動くゲイとレズビアンの会、1995）[xl]

中野区の行政や福祉の分野についても、LGBT 当事者らによる各種活動から評価されることがある。中野区には同性パートナーシップ証明書を発行するような制度はないが、性的マイノリティ当事者が生活の上で実質的な困難を抱えないようにするための議論や福祉制度の設計が個別的な施策として取られてきた。2014 年に東京レインボープライドで中野区長が「すべての人々が「個」の大切さを互いに認識し、地域社会を構成する一員として、地域の中でいきいきと暮らしてゆけるまち」を目指しているというメッセージを出すなど公的な活動の他にも、

---

[16] ゲイ・リブは、ゲイへの社会的差別をなくし人権や社会的地位の問題解消にむけた活動を指す。ゲイ解放運動とも呼ばれる。

LOUD などのスペースを利用して当事者と非当事者の中野区民の交流会を設けるなどの取り組みを行っている。[17]

2015 年、当事者団体「中野 LGBT ネットワークにじいろ（中野にじねっと）」と中野区が共催してシンポジウム「すべての人々が暮らしやすい中野区をめざして」が開催された。中野にじねっとは、LOUD など区内の各団体や、企業などと協力・連携を図りながら、LGBT 当事者が暮らしやすい自治体を作り上げていくことを目標としたネットワーク団体である。このシンポジウムでは中野区長、中野区教育委員会教育長、弁護士、医師、東京レインボープライド代表理事らが参加した。中野区長自ら登壇し、区役所職員内の当事者への配慮や、個別の条例における LGBT 当事者への視点の必要性について意見交換した。以下は、中野区での行政による LGBT 関連活動のおよその取り組み内容と、年表となる。

【１】同性二人暮らしについての「住み替え支援」：区役所にて都市計画分野住宅施策担当
【２】防災緊急連絡先カードの配布：法律上の家族以外も緊急連絡先に記載が可能、区役所にて地域防災担当
【３】同棲カップルの DV の相談：区役所にて生活援護分野生活相談担当
【４】HIV・性感染症の検査・相談（第２，４水曜日の一定時間、および偶数月の第１日曜日のみ休日検査を実施）
【４】免疫機能障がい（HIV 陽性）を含む障がい者の就労相談・支援・雇用促進：区の業務委託
【５】メンタル面・うつなどの精神障がいの相談支援：社会福祉会館内で区の業務委託
【６】中野区区民の声メールフォーム：実際のサービスに不都合などを感じた場合の連絡先

表３、中野区の取り組み一覧

[17]参照：石坂わたると、多様性のある中野を作る会　http://ishizaka.exblog.jp/22142572/

時　期	活　動
2002	区職員に性的マイノリティらの自殺予防の研修を開始
2003	「性同一性障害を抱える人々が普通に暮らせる社会環境の整備を求める意見書」提出
2007	区議会議員選挙にて、日本初[18]のオープンリー・ゲイ公職者として無所属の石坂わたるが当選
2014	東京レインボープライドで中野区長が支援メッセージを表明
2015	中野区主催の「中野まちめぐり博覧会」で企画「LGBT って何？」を実施、この情報が掲載された町めぐり博覧会パンフレットを区内の公立小中学校の全児童生徒に配布 中野 LGBT にじいろネットワーク（通称「中野にじねっと」）と連携し、中野区内でシンポジウムを開催

表４、中野区の取り組み年表

このように、中野区という立地は、性的マイノリティ当事者にとってアクセスの利便性が良いだけでなく、条例制定や行政側のイベントのように当事者が日常的に暮らしていくためのサポートが取り組まれている場所だといえる。中野区という地域が蓄積してきた取り組みの歴史は、LOUD をはじめとする各種の活動に反映し、同時にこれらの活動の意見を汲み取る機会があることを表明してきたともいえるだろう。LOUD が中野を活動拠点とし続けているのも以上のような背景があるという。これは LOUD の活動が友人・恋人探しといった性的マイノリテ

[18] 同日に豊島区議会に初当選した石川大我も、日本初のオープンリー・ゲイ公職者となった。なお、トランスジェンダーの公職者としては 2003 年に上川あやが世田谷区議で当選している。

ィだけの交流を提供する役割にとどまらず、訪れた一人一人の状況にあわせながらも非当事者も含めた社会の中で声をあげていく手助けをするような姿勢にも重なっている。

2. 運営上の理念

2-1. 声をあげるための場所

LOUD は ”LOUD MINORITY”といった言葉から、“社会に対して発言する女たちの場所”という意味を持ち、「安心して話せる場所」を目指してセンターはマンションの 1 室に開設された。1970 年代まで性的少数者の扱いは、日本で変態性欲として扱われてきた。1940 年代には発育の過渡期の現象として女学生間の無害で親密な関係が、同性愛の「エス」として扱われた。1955 年に初めて「レズビアン」という語を冠した書籍が出版される頃には、同性愛は肉体的側面や性的関心を刺激する意味を含むようになった。1960 年代になると、「レズビアン」はタカラジェンヌの影響を受けて新しい流行として捉えられるようになるが、フリーセックスブームに呑み込まれ、心中などをイメージするような異常性が強調されるようになっていった（赤枝、2015）[xli]。

1986 年になると、通称で OCCUR（アカー）と呼ばれる「動くゲイ・レズビアンの会」が発足していた。アカーが公の場で活動しようとした 1990 年 12 月に、府中青年の家事件が起きる。これは同性愛者の人権をテーマとして扱う団体として公共の宿泊施設を利用したところ、この利用が同時に利用していた他団体ならず施設運営者らからも不当な差別的待遇を受けたとし、1991 年にアカーが「府中青年の家事件裁判」を行ったものである。これは日本において同性愛者が市民権を求めた初めての裁判と評されている。この事件の経緯からも、同性愛者がたとえ人権問題をテーマにした集会を開いたとしても、一般的には公の秩序を乱す存在としてみなされていたという時代背景であった。最終的には、米国活動家の支援等を受け、1997 年にアカーが勝訴する形で結審となったが、1990 年代においてはこのような実質的な迫害が存在していたのも確かであり、教育に関する条例や教育の現場においては同性愛に関する記述があれば有害指定図書とされるなど、公の場において同性愛は逸脱した変態性欲とされていた。（藤谷、2008）[xlii]LOUD は、そのような妨害を受けずに活動できる場を確保する視点から設立されたが、それでも設立当初には近隣住民から怪しまれることもあったという。たとえば設立 1995 年当初の頃に、オウム真理教が中野などに拠点があったということもあり、おそらく近所の人から通報され、「若い女の人たちが沢山集まっているということもあってオウムに思われたよ

う」で、警官が LOUD の活動場所まで調べにきたことがあったという。「警官の人も中を食い入るように覗く」様子だったという。府中青年の家事件の成り行きなども注視されていた頃で、このような時代背景については運営スタッフの間でも意識されていた。また、LOUD に限らずセクシュアルマイノリティ当事者による活動団体は、差別や非難を受ける可能性を意識せざるをえない状況だったと考えられる。だからこそ LOUD は、ミニコミ誌の発行作業や各種活動のための場所として求められ、それは LOUD 設立時及び事務所移転時に自主的なカンパが寄せられるといった形でも「応援」されていた。

先に述べたように、特にレズビアンの存在は、可視化されないことや、性的なイメージが強いことから強く注目されることがあり、ゲイによる活動と比べても「凝視され」てしまうものであったという。

映画祭に行くとロビーにブースが出ている。エイズ予防財団[19]とかそういった少しのブースが出ていて。そこに LOUD も初めてブースをだした。ゲイ団体や、お店や、商売でやってる団体などは資金力があるからパレードでもブースでもはれるんですけれども。こっち(LOUD)のような手弁当でやってる女子系の団体は貧乏だと思われていたんですけれども、出ていかないと顕在化をはかれないと思ったんですね。それでなんとかして映画祭とパレードのほうに LOUD としてブースを出すようになったんです。これは女子系の任意団体としてはじめてです。いまだに多くないと思う。東京にはコラボ[20]とかもあるけれどもブースとしてパレードなどにも出ていなかったりする。ちゃんと出ているんだってアピールしないと、顕在化もしないし開かれた場所ではなくなってしまうなって思って、逃げも隠れもしませんと。だから本当に 1990 年代から映画祭とかパレードにもブースをはるようにしたんですね。でも、「レズビアンとバイセクシュアル女性のための LOUD」って看板を出すと、通りがかりの人がびっくりするような感じで、食い入るようにこうやって素通りしていくわけ。（2015 年 8 月 25 日 O 氏インタビュー）

---

[19] 公益財団法人エイズ予防財団　http://www.jfap.or.jp/index.html　HIV/AIDS への普及啓発等の活動をし、特定非営利活動 akta と共同してコミュニティセンターakta を運営している。

[20] NPO 法人レインボーコミュニティ coLLabo　http://info-event.co-llabo.jp/

レズビアンやバイセクシュアルなどの性的マイノリティ女性へ向けられるイメージとは別に、「普通の」生活を送る当事者らはミニコミ誌を通じて交流を続けていた。LOUD 創設メンバーが手掛けていた LABRYS および LABRYS-DASH は、全国規模のネットワークであった。ミニコミ誌上で交流し、活動していた当事者が、会員制の誌面内に限らず、実際に姿を現して社会的な活動を行っていくことは、「逃げも隠れもしない」という言葉に込められたように大きな転機のひとつだったのだろう。

2-2. シェルターとしての役割

LOUD がどのような思いで設立され、どのような方針の下運営されているのかについて、LOUD 代表の O 氏は「当事者の孤立」に対する「安全な場所」の提供が必要であると、以下のように語る。また、そのためには当事者がアクセスできるためにも社会に開かれた場所である必要があるといい、これは性的マイノリティ女性についての理解へと近づけることになるという。この二つの点が強調される理由を、LOUD 創立時の性的マイノリティ女性を取り巻く社会背景から考えてみたい。

> *当事者っていうのは孤立しがちなんですね。自分以外のセクシュアルマイノリティと出会うことっていうのがなかなか難しいんですよね。そういうときに、ある程度管理された、安全な場所で行ける場所があるっていうのはとっても重要だと思うんです。ここに行けば自分の気持ちがわかってもらえるとか、同じような気持ちを共有できるような人に出会えるだとか,セクシュアルマイノリティであることが肯定的に過ごせるような場所ということで、やはり孤立を防ぐために行けるところがあるってのが、一番重要だと思うんですね。*（2015 年 8 月 4 日、O 氏ヒアリング）

セクシュアルマイノリティ当事者の孤立は（Ⅱ章 1-2）、当事者の身近にいるはずの非当事者にも、まして当事者自身にとっても見えづらい状態であり、日常的に自身の存在を否定されたり尊厳を損ねるような経験を過ごす。「肯定的に過ごせる場所」というのは、孤立を防ぐことができ、かつ否定されない「安全な場所」になるという。LOUD には一人一人のセクシュア

ルマイノリティが、孤立し追い詰められたときに避難できる「シェルター[21]」としての役割も果たせるような、来訪者を否定しない場所にしていたいという思いがある。

2-3. コミュニティセンターとしての機能

LOUD 内を見渡すと、壁面のチラシ類掲示と、天井まで届く本棚が並べられている。この巨大な本棚は「LOUD ライブラリ」と呼ばれる。LOUD ライブラリセンターは、主にセクシュアリティ関連の書籍を所蔵しており、その他には廃刊されたミニコミ誌や希少性の高い蔵書、各種団体の過去から現在までのリーフレットがある。LOUD を訪れた人に限らず国内外からの寄付や、LOUD のスペースを利用した団体からのリーフレットやミニコミ誌の寄贈などによって、一般の図書館には残されていない資料も多く存在する。また、室内の壁には、全国各地で実施されるプライドパレードの情報や当事者団体、相談室や勉強会と言ったセクシュアルマイノリティ当事者らによる様々な活動告知の資料・チラシ・ポスターなどが掲示されている。これらは、雑然と偶然にして集まっているだけでなく、意図的に収集し収蔵されているものであり、各種団体の過去の活動チラシなども保存しているという。そのような意図についてスタッフは以下のように述べる。

> *ここは今でもボランタリーベースだし、空いてる時も限られていますよね。ライブラリなんかもとっても充実しているんですけれども、一部の人たちしか借りられない状態。常に毎日空いていて、毎日フラッと立ち寄れて、図書も借りたり手に取ったりできるような小さくてもいいから、本当に LGBT センターのようなものをほしいんですね。*（2015/08/09 O 氏インタビュー）

LOUD のライブラリについて、性的マイノリティの希少な資料の蓄積という点について分析した小澤によれば、LOUD ライブラリはインターネットが発達してセクシュアルマイノリティに関する情報を得やすくなった現在においても、求められるという、それは「ふらっと立ち寄

---

[21] シェルターという言葉は、DV 被害者や、被災者を、かくまう場所あるいはホームステイ先となる場所を指すときに使われる。日本国内に LGBT に特化したシェルターは存在しないが、東日本大震災の直後にはシンガポールを拠点とする LGBT サイト Fridae がシェルタープロジェクトを企画した　（ゲイのための情報サイト gradxx 2011/04/12 http://gladxx.jp/news/2011/04/1341.html）

れる」場所として性的少数者コミュニティを内部・外部から支援する意味があり、利用されるとともに情報を集積し、ライブラリ・アーカイヴと LOUD を利用する当事者コミュニティのいずれにとっても重要な役割を果たす（小澤、2014）[xliii]。

「ふらっと立ち寄れる」場所として O 氏は、不登校児が中学校の代わりに立ち寄る図書館の例を用いる。その中学生にとって、中学校の代わりに立ち寄ることのできる居場所があることが、まずはその中学生本人が生きていくために必要なことだという。そのためには、インターネット上のつながりだけでなく、実際に訪れることのできる場所が求められる。

そして声を上げるための活動する場所を提供しているということは、結果としてライブラリが充実することであり、また集められた情報が活動を支援することもあるという。「いろんな団体がいろんな企画をやっていて、いろんなプログラムがある」ため「こういったところでやっているところが、そっくりそのままそういったセンターに移行できる」と O 氏は述べる。欧米にある大きなゲイ・レズビアンセンター[22]も始まりは小さな部屋だったという。例えば、アメリカ合衆国ロサンジェルスの LGBT センターは建物として 6 拠点を持ち、それぞれの建物には書籍や情報が集められている。しかし現在、日本には建物や部屋として拠点を持つセクシュアルマイノリティのコミュニティの数は限られており、図書館のようにいつでも開かれて当事者がアクセスできる場所が見つからない。

「今 LOUD はこんなちっちゃなところだけれども、センターに移行すれば LOUD のノウハウも本当に持っていけるし、活かせる」という。「そこを目指してというか、常に先につながるものがあるんだ、というのがモチベーション」だという。

3.　小括

LOUD はセクシュアルマイノリティ女性が連帯し団体活動を行うときの、社会的背景に伴った活動しづらさに対応して物理的な空間として成立した。安心して活動できることは、セクシュアルマイノリティ当事者が受ける差別などの困難からのシェルターとなり、孤立していた当事者は顔を合わせることのできる場を確保することができた。立地においても、新宿二丁目のような盛り場からほど遠く、行政上の理解が進みつつある地域が選ばれた。LOUD 創設にあた

---

[22]参考 LGBT CENTER　http://www.lalgbtcenter.org/

っては与えられた活動資金ではなく当事者らの支援金が用いられれ、LOUD は当事者であるスタッフや参加者が自ら参画し「手弁当で」作り上げ運営が続けられることとなった。そのためセクシュアルマイノリティ内の、女性というジェンダー問題を意識しながらも、必ずしも政治的なメッセージや権利獲得のみを主眼とするのではなく、ミニコミ誌などで議論されていたような個別の当事者の＜生＞のあり方や疑問などを反映させつつ、運営理念も参加者との間で共有された。その結果、多様な活動団体に利用されるとともに、広くセクシュアルマイノリティ女性の孤立を防ぐ当事者間の連帯を支援している。

また、LOUD が利用されることでセクシュアリティに関する情報が LOUD に蓄積され、単なる物理的な貸しスペースではなく、コミュニティセンターとしての機能が見られ、これは将来的には当事者の訪れやすさの向上の可能性という点からも運営のモチベーションとなっている。

Ⅳ　LOUD オープンデーの役割

LOUD の運営スタッフらによる活動のうち、オープンデーは誰でも来られる開放日として位置づけられている。LOUD は、あくまでセクシュアリティにこだわる立場として「レズビアンとバイセクシュアルのため」という趣旨を掲げるが、これに賛同する人が誰でも来られるような開かれた場がどのようなものであるか概観し、参加者の声から検討する。

1.　オープンデーの様子

1-1.　オープンデーの流れと概要

LOUD では毎月の開放日として、毎月第 2 日曜日午後 3 時から 6 時にオープンデーをもうけている。事前の予約などは必要なく、時間内の好きな時間に来て受付を済ませばいつ退室してもよい。参加費は一般の参加者は 700 円、維持会員は 500 円で、1 ドリンクとお菓子がつく。ドリンクのメニューは、コーヒー、紅茶の他、「スタッフ特製手作りレモネード」などがあり、2 杯目からは 100 円で注文ができる。

オープンデーは 15 時から 18 時の間自由に出入りができる。ドアを開けて入室すると、すぐにキッチンがあり、スタッフがいる。参加者は受付をしてスタッフに参加費を払い、1 ドリンクを注文する。その後は、室内のライブラリで本を読むことも、手作りのレインボーグッズを扱うキオスクで買い物をしたり、座布団に座ってお菓子とちゃぶ台を囲んで他の参加者と話をすることも自由である。初めての参加者の中には、他の参加者に話そうとしても話しかけられなかったりすることもあるが、そのような場合はスタッフや周りの参加者から声をかける様子も見られる。あるいは、思い思いに本や室内の情報誌やリーフレットを読んでいく人、スタッフと会話をしていく人などもいる。

17 時頃になるとインフォメーションの時間、と言ってスタッフがベルを鳴らして参加者注目を集める。レズビアンカップルの妊活本を紹介したり、各地の LGBT に関する条例制定の動きについて話題に出したり、最近のニュースについて触れる。参加者の中に、紹介したい活動がある場合、その場でリーフレットなどを配布することもある。LOUD 室内にある蔵書や情報について説明をすることで、参加者は LOUD 内にどのような情報があるのかを知ることができる。

「LOUD がどんな所か、のぞいてみたい」「ちょっと本を買いに/借りにいきたい」
「レズビアン・コミュニティの情報を知りたい」「いろんな人と交流したい、コミュニティは初めてだけど友達がほしい」そういったときに訪れてほしいのがオープンデーの位置づけとされている。

図 3、オープンデーの様子、筆者作成

1-2. 参加者と参加形態

LOUD のオープンデーには、インターネット検索や、電話相談窓口や各地方の相談室からの紹介、知人からの紹介といった経緯で新しい参加者が集う。参加の動機やまた来たい理由としては、LOUD スペースやライブラリの利用の他、安全や安心といった感覚や、他者や情報に出会いたいといったものが見られる。参加頻度について、例えば続けて訪れる人もいれば、例えば No.3 の回答者は 10 年前に当時のパートナーと共に数回来たのち、再びこのようなコミュニティを探そうと思ったときに浮かぶキーワードが LOUD であり、インターネット検索からたどり着いたという。10 年続いていることが信頼できるし安心できると感じているという。以下は、2016 年 12 月のオープンデー参加者に対するアンケート調査結果である。

Ⅰ セクシュアリティ・LGBT に関連する活動について

Ⅱ LOUD オープンデーについて

① オープンデーに初めて参加した時はいつですか？動機はどのようなものでしたか？

② 今回のオープンデーは何回目の参加ですか？

③ 「また来よう」と思うとしたら、なぜですか？

Ⅲ 差支えなければ、セクシュアリティ、年代、ご職業を教えて下さい

表 5、オープンデー参加者への質問項目一覧、筆者作成

No.	回答者（Ⅲ）	活動頻度（Ⅰ）	LOUDオープンデーについて（Ⅱ）			
			①時期	①動機	②回数	③理由・目的
1	N/N/N	10	2015年8月から	N	8	安全・まったりできる・意見を求められない。
2	xジェンダー/30代/塾講師・労働組合職員	20	2013年春頃	ミックスの場所が好きなので	20	とりあえずミックスのところにはいろいろ行っているので。スタッフの方もしっかりしているし。
3	レズビアン/50代/医療・教育系	0	2015年12月	安全なコミュニティにアクセスしたかった。	1	安心してカミングアウトできる場
4	FtXレズビアン/40代/専門職	8	2012年2月～	ホームページでラウド内部を知ってライブリーの本を読みたかったので	10	交通の便が良い（駅近）、スタッフの対応が心地よい、幅広い年齢層セクの方がいらして交流が楽しい
5	限りなくレズビアンなバイ/40代/フリーター	3～4	今回が初めて	人に誘われた＆家が近所だった	1	家が近い、逆に何かお手伝いがしてみたい
6	MtFビアン/50代/主婦	12	初めて	交流会つながり、MtFビアンなので	1	知り合いができたらいいかも
7	ゲイ/30代/休職中	20-30	今日がはじめて。しかしLOUDに来たことは数回あり。	運営している自助グループでLOUDを使いたいため。	1	交流会開催のため、中野にじねっとのミーティングのため
8	レズビアン/30代/会社員	1～2	今日が初めてです。	友人にさそわれて	1	LGBT関連の本を読みたいため。セクマイの方と話すため。
9	バイセクシャル/40代/会社員	10	2013年　12	友達が参加と聞いて	10	交通が便利で参加費が安いから
10	女性/20代/学生	4	今年の10月頃のオープンデー	大学の社会学の研究のため	3	アットホームな雰囲気
11	FTX/20代/N	10	2015年12月13日	家から近いから	1	N
12	IS-MTF/Secret/biligeel IT Manager	10	Right now	my friend took me	my first time	情報収集、networking
13	MTFビアン/30代/会社員	12	3～4年前	共通の知合いに連れられて	6～7	場所が安い、値段が安い

表６、オープンデー参加者の回答一覧、筆者作成

※（N は無回答）

一覧を見ると、参加者は「レズビアン」「バイセクシュアル」に限らないセクシュアリティの当事者がみられる。毎週のように訪れる人がいる一方で、初回の参加者も多い。また、何年も前に訪れたのちに再び参加するといったケースも見られ、オープンデーは同質な固定のメンバーの参加による集まりというよりは、流動性があり再び戻ってくることができる場所だろう。また参加の理由も統一されていない。「意見を求められない」「ミックスのところ」という回答については、運営スタッフの想いとあわせて、後ほど検討していきたい。

1-3. オープンデー運営におけるスタッフの意識

1-3-1. 最小限の介入

オープンデーでは LOUD スタッフは、会場準備としてのお菓子やちゃぶ台のセッティング、参加費の受付とドリンクの提供、インフォメーションの時間を覗いて参加者への介入を最小限にとどめる。例外としてはトラブルが生じそうな場合や、参加者からの相談をもちかけられていた場合、誰かに話しかけるために訪れたものの会話の輪に入れないような状況で、そのときはスタッフから話しかける。「オープンデーについて。敷居を低くというのは LOUD のスタッフの意識にはあるんですよね。いつでもだれでも来られるような感じ。色々聞かれるんじゃないかとか思うと、これなくなるでしょう。そういうことがないようにと。」とスタッフの K 氏は答える。そういった共通意識がどうしてあるのか尋ねると以下のように答えた。

> *みんなやっぱり、自分の初めのころを忘れていないからなんじゃないかな。行くところがなくて、ひとりぼっちで。それが誰にでもあると思うんですよね、最初のうちって。最初はドアの前でうろうろしちゃったとか。どうしようって。ドアを開けないで帰ったっていう人もいるんですよ。そういう人の場になれるといいかな、って。*
>
> （2015 年 10 月 K 氏インタビュー）

「初めのころを忘れない」という感覚を、K 氏以外の運営スタッフも語る。また、参加者が初めて LOUD を訪れたときについて「そういうところに行くのが初めてだから、緊張した」と語ることがある。「そういうところ」、というのはレズビアンやバイセクシュアルと呼ばれる人たちが集う場所を意味し、自分自身がそのような普通ではないとされる人たちのいる場所に行くことへの不安が語りに表れている。

また、「色々聞かれるんじゃないかと思うと」という表現にあるように参加者の中には、自分自身の説明や意見を求められることに「疲れてしまう」人もいる。オープンデーでは本を読むために訪れる人や、語るよりも人の話を聞くのが好きだという人も訪れる。性的マイノリティの活動では、自己紹介タイムの設定された交流会、テーマセッションや勉強会、などが多いという。レズビアンのための友達づくりイベントで、3 分ごとに新しい相手に自己紹介をさせられるので疲れてしまった、という雑談が聞かれる。LOUD では、ちゃぶ台のある畳の部屋でめいめいが好きな場所に着席し、語りたいときだけ自分の話をすることができる雰囲気があ

る。「話したい事が決まっている人」などはテーマセッションのほうが適していたり、あるいは他の参加者に話しかけるタイミングを自分で決定しなくてはいけない点で自己紹介を強要されるほうが楽だと感じる参加者もいる。

1-3-2.　「自分たちのできる範囲」で

手弁当での運営にあたって、スタッフらは「乗りかかった舟」だからといい、運営上必要な労力の大きさを自覚するとともに、続けていくために「自分たちのできる範囲で」運営をするといいう。オープンデーはLOUD創設以降「一度もお休みをしたことがない」が、キャンドルナイトなどはスタッフの都合がつかないときにはお休みをすることがあるという。それは、それぞれのスタッフが日常的な仕事を持っていること、それをないがしろにしてはLOUDの活動もままならぬようになること、そしてスタッフ自身らに限らず、セクシュアルマイノリティとして生きる上で仕事をもって経済的にも身を立てていることは必要であるからだという。

2.　A.I.氏のケース

参加者のA.I.氏の参加動機や、LOUDに来る理由をみてみたい。A.I.氏は20代で、福島県の短大を出て現在は社会人二年目、東京で企画営業をしている。LOUDに来る前から、自分自身の性別に違和感を覚え、テレビで見かけた「トランス」の兆候があるかもしれないと思っていたという。LOUDを訪れたのは、東京に上京してから、いくつかの「トランス」やセクシュアルマイノリティについての情報やコミュニティにアクセスしようとする中で、電話相談窓口から紹介されてオープンデーに訪れたという。

2-1.　安心できる場所を求めて

A.I.氏は、就職して東京に来てから2・3か月たったころに、インターネットで情報を検索していたところ、悩みを持つ人が集まるための会を見つけたという。とにかく「トランス」や、それにまつわる情報を求めていたこともあり、参加した。そのときは、駅で集合して、「それっぽいバスで連れまわされた」あと、都内で住所がわからない場所の「怪しいビル」に連れていかれたという。駅で集合してから建物にまで向かった参加者の中には、「トランス」らしい人に限らず、明らかな女性なども参加者にいた。しかし、建物のなかで体を見せてほしいという依頼されたりしている様子から、明らかな女性が体を見せることも含めて「何かが違う」と

思ったため、着替えを求められる前に見つからないようにそのビルから逃げ出したという。後日、この集まりについて調べてホームページを詳しく読み返したところ、悩む人のための集まりではなかったという。「*よくサイトを見たら、悩んでた人をくいものにするサイトだった。*」という。その後、その経験を含めて NHK ハートネットで知った電話による相談窓口から、LOUD を紹介されたのでオープンデーに参加した。

LOUD は電話相談窓口や、各地方のセクシュアルマイノリティの活動から、東京でサポートを受けることのできる場所として紹介されることがあるという。長く運営しており、スタッフもそのように他の電話相談窓口から、顔の見えるサポートを求めて当事者が訪れることを知っている。

性的マイノリティ女性がポルノグラフティ―のイメージを抱かれることについて再三触れてきたが、実際に職場や知人からセクシュアルハラスメントを受けた体験談などが LOUD 参加者の間で語られることがある。しかし、LOUD においては少なくとも、セクシュアルマイノリティであるからという理由で好奇心から体を触られたり、奇異の目で見られることや、そのようなリスクがほとんどない。繰り返し通う参加者からは、LOUD の「スタッフがしっかりしている」という信頼の感情が聞かれることがある。それは LOUD スタッフがオープンデーのときに、最小限の介入を意識した行動をしているものの、これが全くの無関心ではなく、参加者を見守る形で注意を払っているということが参加者にも伝わっているということを意味している。スタッフはドリンクを運ぶ際などに、参加者間の会話の流れを断つことなく一言二言声かけをすることがある。「最近どう」「これ知ってる？」「ちょっといいかな」といった声かけなどである。LOUD に何度か来るうちに顔と名前を覚えてもらえるのがいい、という参加者もいる。

LOUD は、実際に顔の見えるスタッフがいること、スタッフらによって参加者が傷つけられないよう配慮された空間であることの二点から、参加者らから「安心できる場所」として求められているのだろう。

2-2.　定まらないアイデンティティ

A.I.氏はショートヘアで長ズボンをはいたボーイッシュとされる服装でいた。オープンデーで他の参加者から「FTM なんですか？」と尋ねられると、A.I.氏は「最近、自分自身は TV（トランスヴェスタイト）と思う。自分はこういう男性の服装を着ていたいんだよね。２年前

にそういった言葉を知ったんだけど、そうなんだなって。」と答える。さらに他の参加者が「それは、異性装やクロスドレッサー？」と尋ねると「そう、だけど異性装やクロスドレッサーとも違う。この本の人なんか、自分に近い感覚だと思う」といって、LOUD ライブラリから本を取り出し、ページを開いて説明をする。LOUD ライブラリの蔵書の中には、セクシュアルマイノリティ当事者の手記や、日常生活を描いた漫画や小説などがあり、その本には、性別に違和感を感じた後に男性の服を着るということについて日頃考えていることなどが表現されたイラストや漫画が掲載されていた。セクシュアルマイノリティ当事者も通常の日本国内での教育を受けくる限り、女性／男性の性別二元論や異性愛が当然だという規範の中で育ち、その価値観を内面化している。そのため、はじめから自分自身について説明できるようなカテゴリや言葉を持っているとは限らない。A.I.氏のケースも、「トランス」という言葉をテレビの情報で知ったことをきっかけに、自らの違和感について自分だけでなく他にも似たような人がいるのではないかと考え、探り始めるようになった。

オープンデーでは、自己紹介は強要されないが、同じちゃぶ台でお茶を飲みながら話をする流れで、異なるセクシュアリティの参加者同士がセクシュアリティについて話し始めることがある。直接的に相手のセクシュアリティを尋ねることもあれば、最近のニュースやテレビの特集などの話題の流れでそれぞれが自分の経験や話を語り出すことがある。たとえば、2016 年が教科書の改訂の年であり、そこでセクシュアルマイノリティについて触れられるかどうかといった話題が出たときに、そこから、それぞれが義務教育時代に体験した事考えたことなどを語り出すといった具合に、一般的な話題が個人的な語りにつながっていく。そのようなときに、A.I.氏のように自分自身のセクシュアリティについて定まりきらない状態から、会話を通じて少しずつ探るような光景はオープンデーにおいてしばし見られる。

2-3. セクマイ「あるあるの話」

A.I.氏が LOUD に来る理由の一つには「あるあるの話」ができることが挙げられるという。「あるあるの話」は、たとえば彼氏（または彼女）の有無を尋ねられるような異性愛規範に基づいた質問や対応をされたときのような、セクシュアルマイノリティ当事者に共通しそうと思われる経験だという。

> *たとえば職場でのこと。職場での人間関係が変わって、結婚の話題とかでどういう人と結婚をしたいかとかそういうことを話した時にありえないって言われて。面と向かって否定され*

るようなのはキツいんだよね。そういったことは、信頼できる電話相談でしていた。会社の人とかに話して噂になるのも嫌だし。けど、ここでは、あるあるの話ができるのがいい。

この語りにおいての「あるあるの話」が指すのは、職場で新しい人間関係ができて飲み会や日常の場面で結婚や恋人、好きなタイプについて尋ねられた場合についてである。結婚をしていないことや、好きになるタイプが必ずしも男性に限らないことなど、ぼかしつつも回答するなかで、相手から繰り返し「ありえない」「間違っている」という言われたときに、傷つくことがあるのだという。あるいは、「ありえない」理由について語ろうとすれば結果としてカミングアウトせざるを得ない状況となるため語ることができず、対処に困る状況に陥るという。カミングアウトすることそのものでなく、飲み会などの笑いの「ネタ」として扱われることが、傷つくという。LOUD オープンデーの参加者は必ずしも「レズビアン」か「バイセクシュアル」とは限らないし、様々な経験を共有した時に、話し手と聞き手の間にどれだけの深い理解や共感が生じているのかは判断することができない。しかし、すくなくとも「面と向かって否定」されない程度に相手の話を聞き続けるような共感が生じているし、「LOUD の主旨に賛同」するという参加条件によってイメージや偏見による相手への決めつけをしないという意識が共有されている。2-2.「定まらないアイデンティティ」の節のエピソードについては、その後も A.I.氏と他の参加者が「トランスヴェスタイト」かもしれない A.I.氏のセクシュアリティについて、質問を交わす様子が見られた。A.I.氏の発言に対して、異なるセクシュアリティの参加者からは「知らなかった」「そうなんだ」という返事がされていた。

大学の社会学のゼミで、セクシュアルマイノリティの当事者と話をしたいと思い LOUD に訪れたストレートの女性の学生は、ストレートの女性を好きになったレズビアンの話を聞いて、「ちがうかもしれないけど、ちょっとわかる気がする」と述べる。あるあるの話は、部分的な同質性や感情・体験の共通点によって成立することもあれば、理解はできないままに質問を交わして尋ねあうという雰囲気によって続けられることもある。まずは聞き続けるというレベルでの他者への共感は、一人一人異なる経験を持つ参加者の間に「あるあるの話」を成立させる。

3. T 氏のケース

参加者の T 氏の参加動機や、LOUD に来る理由をみてみたい。T 氏は 30 代女性のカウンセラーである。2015 年 11 月の LOUD オープンデーに参加した T 氏は、自身も当事者として、

性的マイノリティ女性のための活動に取り組むレズビアン女性である。聞くだけでなくて、自分もセクシュアリティや関連する話題について「話したくなるときがあって」ときどき LOUD に訪れるのだという。初めて LOUD のオープンデーに訪れたのは 5 年程前。そのとき既に自分自身のセクシュアリティのありかたについて気づき始めていたという。それまでは交流型の SNS である mixi や、ウェブ掲示板等のインターネットを通じて、様々な悩みを抱えた人達と連絡を取り合うなど、自分自身が誰かとの交流を求めると同時に人からの相談を受けることが多かったという。

3-1. セクシュアリティ関連の書籍への関心

T 氏が LOUD の存在を知り、実際に訪れようとまで考えたきっかけは、セクシュアリティ関連の充実した書籍があるということだった。LOUD の存在については、LOUD の存在自体が一定の知名度をもっていたこともあって、インターネットの情報で知ったという。元から本が好きであったし、セクシュアリティや様々な当事者のケースについて書かれた本は自身でも集めていたが、「いくら amazon で買えるからといっても全て買えない」と感じて足を運ぶことに決めたという。LOUD には寄贈も含め、絶版の本から、最新の本まで揃えられている。アンケート結果からも「本を読みたい」「情報収集のため」といった目的が回答されている。

参加者の一人は、セクシュアリティに関する書籍について、それが読み手にとってのロールモデルの発見になるという。「言葉だけで知っているのも大切だけど。フィクションだとしても、そういう存在を知ることは大切」だという。

T 氏の場合は、自分にまつわることについて読み知りたいということと、カウンセリングをする上で広く学びたいという気持ちがあって「本が好き」だからライブラリに通い続けたという。LOUD ライブラリは、参加者本人にとって必要な情報を提示することもあれば、参加者が他の当事者に関わっていくときに求められることもある。

3-2. 新しい活動への広がり

オープンデーに通い本を借りていく中で、T 氏はオープンデーの運営スタッフであるO氏とお喋りする機会を持つ。当時 T 氏が、インターネット上で性的マイノリティ女性を含めた悩める人たちの相談を受けていることや、カウンセラーの勉強をしていることなどをO氏に伝えたところ、LOUD のスペースを利用したカウンセリング会を開催してはどうかというアイデアが

出てきた。細く長く、行けば誰かがいる部活のような気楽な場所を作りたいと思い、カウンセラーとして月に一度の相談会「ひだまりルーム」を開催し、また当事者同士が出会うことのできる「L 女子会」運営にも携わるようになった。「どこにも話せなかったことを、自分も当事者だってことで、それは当事者というのがよくないというのもあるけれども、話しやすいというのはある。」といい、当事者は当事者にこそ安心して相談ができる側面があるという。また、自身が運営し携わる活動については、参加条件となるセクシュアリティを「女性」にしているという。その理由について（性的マイノリティ女性の）中には、男性、「ゲイとか LOUD に来るような人ではない、いわゆるシス男性[23]」恐怖症の人も多かったりするからであると述べる。T 氏もまた、LOUD 運営スタッフのように、自らの経験や知見をもって、当事者のための活動を展開している。

4. A 氏のケース

ロングヘアで柔らかい印象の、参加者の A 氏の参加動機や、LOUD に来る理由をみてみたい。A 氏は 30 代、派遣で IT 関係の仕事をしている。2 年程前に初めて来て以来、通算で 5～10 回くらいほどオープンデーに参加している。訪れたきっかけは、以前に mixi で知り合った友達に教えてもらったからであるという。8 年前にはじめてセクシュアルマイノリティとしての当事者のコミュニティにアクセスしようとしたきっかけは、トランスとしての受診や、病院の話などをしたいということだった。そのため GID 当事者の集まりに参加していたという。

4-1. 参加条件をめぐる自問

「他のグループについてはわからないけれども、LOUD では特に自分について言わなくてもダメではない。」女性のグループだと MtF は参加できるかわからないという。

> *LOUD は安定してから、はじめは、とりあえず行けるというところで行きました。交際のための出会いとか恋愛とかに限らない。好きになるのが男性か女性か、自分についてわからず。はっきりしない状態でした。逆に、行かなければビアンの人と会うことがなかったから。当時は新宿二丁目の存在も知らなくって。知っていたとしても連れて行ってくれる人は*

[23] 非トランスジェンダー、生まれたときの性と性自認が一致している人。

いなかったと思うし、そもそも二丁目であっても（FTM の）自分が行ってもいいのかがわからなかったかな。（2016/12/27 A 氏インタビュー）

アンケート（Ⅳ章 1-2.）を見ると、LOUD に初めて参加した「MTF ビアン」（No.6）の人の参加動機に「MTF ビアンだから」という回答がある。たとえば「レズビアンのためのイベント」というときに、戸籍が男性の MTF レズビアンが参加してもいいのか、参加を希望する当事者にとっては判断することが難しい。事前にセクシュアリティが限定されたイベントについては、参加した後に奇異な目で見られたりする可能性があるとして、一般的にトランスの当事者にとってアクセスしづらいこともあるという（V 章 1-1-1.）。

いわゆる「ミックス」と呼ばれるイベントでは、参加にあたってセクシュアリティの制限が課せられないが、「女の子」のためのイベントでは身体的特徴からレズビアンから敬遠されることがあると語る MTF 自認の人もいる。「スティグマのある人は、＜同類＞の人びとを、そのスティグマが明瞭で、目立つ程度に応じて層別化する傾向を示す。たとえば、自分自身よりいっそう判然とスティグマのあることが分かる人びとに向かって、常人が自分に対してとるのと同一の態度をとることがある」（ゴッフマン、1970）とすれば、必ずしもあるカテゴリとされる性的マイノリティの人が、同じカテゴリと思われる他の性的マイノリティに連帯感だけを持つわけではない。MTF 当事者が「女性向けイベント」に参加できない時代もあり、そのことを知るトランスのレズビアンは、参加してみようという試みさえ躊躇うことがある。

LOUD が、オープンデーに限らず、スペース利用についても MTF 当事者を受け入れることになって経緯について以下のように語られる。

5、6 年前には、MtF レズビアンを排除する時代もあったし。第一回から MtF レズビアン参加していたんだけど、最終日に来年度だれがオーガナイザーやりますかってなって挙手して、やるのね。それで同じ人が二年続けてやらないようにしましょうと。それで、オーガナイザーが変わるとカラーが変わるのね。で、参加条件がざっくり自己申告女子、だったのが、あるとき、SRS 済、性的適合手術済の戸籍の変更をしている人、戸籍上女性のみになった。そうすると大概の MtF レズビアンがアウトなんですよ。日本において、戸籍の変更の要件がすごく高いことわかるでしょう。日本だけなんです、こんなにハードル高いの。イギリスだったら自己申告と医師の診断があれば変えられる訳。そういう中だから、SRS だって百万単位でかかるわけですよ。誰もができるわけではない。だから、それは少し考え直そう

よって私が口火切ったんですね。なぜかっていうと、LOUD にはたくさん MtF レズビアンくるでしょう。そういう人たちを排除するのって悲しくって。そこで私一人ではできないので、何人かと要望書を書いたんです。厳しくないですか、と。まだ現状ほとんどの人たちがそこまで到達していないから。とにかくウーマンズウィークエンドの第一回から参加していますよね、と。だけど聞き入れてもらえなかったの。それどころか、さしたる理由ももらえなくて、襲われるからだとか。偏っていて。どうも最終的に聞いてみると、レズビアンの自分として、MtF は決して自分の恋人とはなりえない存在だから。だから入れたくないという。だから、皮膚感覚で嫌なのよってことなのね。（2015/08/25 O 氏インタビュー）

かつて、いくつかのセクシュアルマイノリティ女性向けのイベントでは、主催者か逐一参加者に「あなたはレズビアンですか？」といった確認をとることもあったという。興味本位の参加者や何らかの危害といったリスクへの対応という側面であるとも考えられるが、「皮膚感覚で嫌」という問題が大きいという。

トランスの当事者に限らず、X ジェンダーや、クエスチョンのセクシュアリティを持つ当事者にとって、セクシュアルマイノリティのため集まりに対して、自分自身が参加条件を満たしているのかという自問がつきまとう。A 氏のように、行ってもいいのかわからないから「行かない」という選択肢をとる当事者は、その孤立が他のセクシュアルマイノリティ当事者からも見えない場合があるし、そもそも「行ってみようかな」という欲求さえ自分自身でなくしてしまうことになっていた。

4-2. セクマイコミュニティ参加の動機の変化

A 氏が初めにセクシュアルマイノリティのコミュニティに参加したのは、自分以外の人たちに出会いたかったことと、病院に関する情報を得たかったからだという。LOUD オープンデーについての参加の目的は、当初は誘われていったという感覚で、今のオープンデーに来る理由は、究極的には出会いがあればいいなというところがあるという。

LOUD のスタッフらは、オープンデーの参加者について、元気になり、しばらく参加していたら来なくなってまた訪れるということがあるという。もしもオープンデーの参加人数を維持し、安定的な参加者数によるコミュニティにしたいのであれば、飛び込み参加が可能な現在のような仕組みには設計していなかっただろう。参加者が、来たり、来なかったり、流動的であ

ることを受け止められるような予約のいらないイベントは、そのときどきの参加者の必要に応じることができる。

5. LOUD オープンデーについての考察

これまでの LOUD オープンデーの様子と、参加者の語りから、オープンデー参加者がどのようなニーズをもって参加しているのかについて考えたい。

5-1. 「わからない」状態への受容

LOUD のオープンデーについて、自分自身のセクシュアリティが定まらない状態や「ただ聞いていたい状態」あっても否定されないこと、たとえば「いきなりタチかネコ[24]か聞かれない」のがいいところだと言う参加者がいる。あるいは「（恋人探しで）見定める人がいない」とも語られる。アンケートでは「意見を求められない」（Ⅳ章 1-2.）という回答があるように、自分や、自身のセクシュアリティなどについて話すことを強要されないことなどが、来る理由に見られる。一方で FtX ジェンダーにとって、女性だという前提で話しかけられるのは居心地が悪いと感じる過去の参加者などもいて、必ずしもいつでもカテゴリの決めつけが回避されているわけではない。しかし、自己紹介や名札などが強要されないオープンデーの設計として、セクシュアリティのカテゴリが確立していないままでも参加できるという仕組みがなされている。

自分が何者かわからないということについて、オープンデーに参加した、男性の I さんの語りから考えてみたい。I 氏は「ある、性に関する障害」で男性ホルモンが出ないため、ホルモン投与を続けている。LOUD で行われる性分化[25]会に以前参加して、そのときにレズビアンの困難というのを知ったが、わからないのでレズビアン当事者に実際に話を聞きたいと思って参加した。レズビアンについては、「どうして女性が女性を好きになることが、困難になるのかわからない」という疑問を持つ。それは、「自分よりも人数が多いし、表舞台にも出られる

---

[24] 主にセックスにおいて、リードする側（タチ）とリードされる側（ネコ）を指す言葉で、疑似的な男側・女側の意で用いられることもある。

[25] 性分化疾患の略。染色体や生殖腺、または性の発達が先天的に定まらない状態を指す。

し、アイデンティティ形成してつながっていくこともできる。理屈ではわかるけど、同性愛者であって具体的にどういうことが困難なのか」という疑問だったという。しかしそのときに、参加者から、レズビアンもレズビアンとして自分を認めにくいということ、ポルノだと思われてしまうために認め辛いのだという経験を聞く。I 氏はしばらく黙った後に、性に関する障害とは別の受診、自分自身が受けているカウンセリングや生きづらさについて語り出す。

> *エリクソンがいうには、人は自分のアイデンティティを統合してから初めてその人の人生を生きるって。今、自分はそれを目標にしたカウンセリングを受けていて、自分は今までそういうのができてなかったから。そういう、アイデンティティの分裂、みたいなのはわかります。*（2015 年 11 月 9 日　I 氏インタビュー）

もちろん I 氏と、多くのレズビアン当事者、そして一人一人のセクシュアルマイノリティ女性の生きづらさはどれ一つ全く同じものは存在しない。しかし、自明のものとして確立されたセクシュアリティではない、マイノリティとしてのセクシュアリティを持つ自分への不可視な状態が、否定されない場所、というものに居心地の良さを感じる参加者がいる。

5-2.　「出会う」というニーズ

オープンデー参加者の多くは、誰かに出会うため、あるいは誰かと話すためにオープンデーに訪れている。ここでいう「出会い」について、恋人探し、暇つぶしや雑談以上の意味を持つのかどうか考えてみたい。

LOUD スタッフが、当事者が孤立に対して「自分以外のセクシュアルマイノリティと出会うこと」「同じような気持ちを共有できるような人に出会える」ために LOUD という場所を運営していることや、「セクマイの方と話すため」（Ⅳ章 1-2.アンケート No.8）という回答から、ヘテロセクシュアルではない誰かに出会いたいという趣旨が読み取れる。その理由の一つは、否定されないことや安全だという感覚（Ⅲ章 2-2.）にあるが、もう一つの理由として自分自身のアイデンティティを確立しようとする心性が見られる。

FtX の O さん（50 代、自営業）は、LOUD が前の建物にあった頃からオープンデーに参加していた。LOUD が主催するもう一つのイベント、キャンドルナイトに 80 人集まっていた頃から、オープンデーとキャンドルナイトに参加していた。「その頃はベランダが喫煙所だった

から、たばこ吹かしながら室内を見て、あの子かわいいなーとか思いながら軽いノリで」、続けてくることもあれば、数か月・数年空けてから訪れることもあるという。出会うことが自分をわかることだという O さんの語りを参照したい。

> *男性と付き合っていて結婚まで考えられるような相手がいたこともあった。もし結婚してしまっていればヘテロでいたかもしれない。だけど何かが違うかなって気づき、自分についてわからないと思うようになった。当時は、今みたいに出会えなかったしね。*
>
> （略）
>
> *まだ、自分についてまだわからないときや、ＦｔＸなのかもしれないといった決めていないときでも立ち寄ることができるのはいい。*（12 月 20 日　O氏インタビュー）

T 氏（Ⅳ章 3.）も「自分自身が、色々な人の話を聞きたい」と思いオープンデーを訪れるのだという。また、A.I 氏のアイデンティティは（Ⅳ章 2-2.）書籍を通じたロールモデルの発見や、参加者間の会話から輪郭を描き始めた。もちろん、上記の O 氏がかわいい子を探したり、MtF レズビアンの自認があった段階でオープンデーを訪れた A 氏（Ⅳ章 4.）のような意味を特定しない「出会い」を求めたり、一般的なパートナーを探すという意味での出会いを求めにくることもあるだろう。しかし、いくつかのヒアリングからはセクシュアルマイノリティ当事者にとって他のセクシュアルマイノリティの存在や語りといった「出会い」が自分のわからなさに対する糸口になることがあることがわかる。自分自身の不確かなセクシュアリティを描き出し見えるようにするための契機が「出会い」であり、これはオープンデーに求められている要素のひとつといえるだろう。

5-3.　小括

LOUD の運営側の背景や理念に対し、本Ⅳ章では実際にオープンデーに訪れた参加者によるアンケートやヒアリングをもとに、参加者がオープンデーに求める要素について検討した。セクシュアルマイノリティ特有の、内面化された異性愛規範による、自身のアイデンティティの揺らぎや不可視感が受容されること（5-1.）、そしてその課題の解決の手掛かりとなるような自分自身のアイデンティティを描き出すきっかけとなる「出会い」や情報（5-2.）繰り返し来ることから、そのような求めに対するケアが、参加者・スタッフらとの交流のある「オープンデー」という場で成立していることが考えられる。

V　考察

1.　LOUD の特徴

Ⅳ章では、LOUD の公開活動であるオープンデーを事例として、オープンデー運営スタッフと参加者の、オープンデーに対して求める要素について分析した。Ⅴ章１節では、ＬＯＵＤオープンデーが参加者に求められる場として成立するための「ＬＯＵＤの特徴」について考察し、次節においてはその特徴がなぜ不確かなセクシュアリティに対してケアをなしているのかについて検討する。

1-1.　当事者に＜開かれた＞場所、という意味

1-1-1.　誰でも“行ける”　―MTF レズビアンらの存在

LOUD オープンデーでは MtF レズビアンに限らず、参加条件においてセクシュアリティを問わない。それは、LOUD が「レズビアンとバイセクシュアル女性のための」という看板を掲げたときの狙いにも見られる。

> *なぜかっていうと、バイセクシュアル排除っていうか批判もすごかったんですね。バイセクシュアルを正しく理解していなかった、わかっていなかったっていうのもあるんですけれども、“いいとこどり”じゃないかって。女子だとすると、所詮は男と結婚していくわよとか、どうせ養われていくでしょとか言われたり。だけどバイセクシュアルという人たちは確実にいるわけだから、あんまりそういうのは否定批判をしたくなくて。だからこれは、バイセクシュアルっていうのを出しただけでもすごく画期的だった。*（2015 年 8 月 25 日Ｏ氏インタビュー）

セクシュアルマイノリティ女性が置かれた立場への理解、という LOUD の主旨への賛同という条件や、レズビアンやバイセクシュアル女性のためのスペースといったことと、矛盾しない。

たとえ「冷やかし」でもセクシュアルマイノリティ女性について理解してもらうチャンス、と言うのと同時に、スタッフはセクシュアルマイノリティ内の差別の意識について触れる。

（シスのレズビアンが MtF レズビアンを排除する動きについて、）*マイノリティ同士の理解がとっても希薄だったっていうのもあるし、マイノリティ同士の中でも差別、良く言って区別があった。それはやっぱり、コミュニケーション、理解が足りてないわけ。不安をぶつければいいわけ。それと、男から女へ、男性特権を身につけている人もいるわけ。男性特権、ケイトという MtF の論客が打ち出したんだけど、自分が女社会になかなか受け入れてもらえないことを考えたとき、男性特権を身に着けているからだと。かいつまんでいうと、どんな場所でも自分の意見を押し通すとか、頼まれていないのにその場をしきりたがるとか。なるほどなって感じじゃない。でも、男性特権が備わってしまった過去っていうのはその人の責任じゃないじゃない。社会の責任じゃない。ジェンダーの偏りを押し付けたのだから。その人の責任でないのに、そこを嫌がるのであれば、男性特権がときどき見えるからそういうのそぎ落とした方がいいよとかさ、もうちょっとうまい言い方で。そうやって、こっち側はコミュニケーションをとる努力をしないといけないわけ。*（2015 年 8 月 25 日Ｏ氏インタビュー）

セクシュアルマイノリティであるが、レズビアンではないゆえに LOUD にアクセスしてはいけないのではないかとトランス当事者が遠慮し、実際にはニーズがあったということもあったという。

こちらがわの気構え、もってるカードが重要で。いろんなことを考えているわけで。あるところで来ないでください、と言われた人が、問い合わせして LOUD にきたんですね。ですが、創設当初から T さん、金八先生のドラマの FtM のモデルになった人でアメリカいって女性から男性になる SRS を最初にやった一人者なんですけど、その人なんかは自分の FtM 日本なんて本を作るために印刷機のある LOUD に来ていたんですけれども。LOUD でも議論があったんですけど、あいさつしたいっていうことで連絡がきて、TMJ っていってトランスネットジャパンっていう団体の人が何人か菓子折りもって「ありがとうございます」ってきて。けど、「ありえない危惧ですけれど、MtF には骨格や筋肉が男性である人もいるんですね。万が一のことがあったら。それは勿論ないことだと思いますけれども」とあえて向こうからその話をしてきたんですね。こちらも「そういったことを言ってくださってありがとうございます。でもどうぞお気軽に来てください」っていってから、どんどん来るようになったんだけど。今までそういった問題ってなかったんですね。レズビアンであばれたりパニックになったり救急車よんだりとかもあって、セクシュアリティに関係なくてパーソナリ

ティの問題であって。自分たちの安全を守るということで、排除するということがあっちこっちで行われていたので、ただ LOUD では引き受けましょう、っていう決断をしたんですね。だから、たぶん、都市論みたいになりますけど、地方だと LGBT ごったで活動しているんです。東京ほど細分化しているところはないんです。その中でも特に LOUD はごったで来るところです。MtF レズビアンが来るところが少ないんです。FtM ゲイが少ないじゃないですか、割合として 9:1 で。FtM でヘテロの友人に、なんで、って聞いたんですね。そしたら、まがいものの男性器つけた FtM をゲイが相手にするわけないじゃんって。特に FtM の場合男性器の形成まで SRS の要件に入っていないし。FtM ゲイって自認があっても、自認と向き合うことは難しかったりするんですよね。男といざ関係を持つと女として見られる。とか。そうすると、FtM 同士が分かりあうっていうのあるんでしょうね。（2015 年 8 月 25 日Ｏ氏インタビュー）

セクシュアリティを特定のカテゴリに属するものとして定められないような、セクシュアルマイノリティ当事者のなかでも特に見えづらい存在にとって、否定されることに不安を抱き自発的にコミュニティに参加しづらいという状況がある。そしてそのような当事者は、ヘテロセクシュアルで規範から逸脱していないとされる人びとから見れば、同じセクシュアルマイノリティであるにも関わらず、セクシュアルマイノリティ当事者からも孤立をする。これは、ストレートヘテロの社会がレズビアン・バイセクシュアル女性に向けてきた差別の構造と同じであると O 氏は語る。その構造そのものを問い直すためにも、セクシュアリティを問わずに「引き受ける」という態度ですべてのセクシュアリティを受けいれるのだという。

1-1-2.　“入れる”空気感　―否定のない共感

参加者は、最近の出来事をめいめいに話聞いたりしているが、そこでは「それはいいねー」「えーやだー」といった一見他愛のない感嘆が交わされる。必ずしも双方が事情聴取のように仔細を掘り下げるとは限らない。しかし、ここで語られるそれぞれの体験は語り手のみが経験したものではあるものの、そのときに感じた思い、怒りや嬉しさといった感情について、部分的に共感しあう様子がみられる。ストレート女性としてのマイノリティでない参加者が、レズビアン女性の恋愛話やカミングアウトの困難について、「それはわかるかも」「たしかに」と部分的に共感している様子などが見られる。同時に、わからないことについてはわからないと伝え、全ての共感や理解ができないことも伝える。

性的マイノリティのコミュニティの多くは、「LOUD の趣旨への理解」という一定の参加条件に基づく同質性が求められ、参加者はその点を求めて参加することが多い。レズビアン・コミュニティが、自分自身を移す鏡として機能する当事者間のコミュニティであると分析されることがある（堀江、2015）。また、LOUD 以前のレズビアン団体が、たとえば長い髪を持つ参加者に「参加していくうちに単発になるものなの」と語るように、均質化を求めていたりすることもある。

しかし実際の社会に生きる人は同質ではない。快楽を求めて性差や性の差別を享受する人もいれば、自分のあり方を優先することもあり、逆説的ではあるものの「あなたもあなたであろうとすれば、「ヘンタイ」なんだ」（伏見、1998）[xliv]という見方は、わかりあえないことを前提としながらも、異なる他者間に一定の共感を生み出す。

来た時に話していることは、世間話とか…。セクシュアリティ関係の話に限らず、最近の話とかで。私は聞いている側になることが多いかも。場所は、床に座るとか、ちょっと狭いかな。（2015/12/27 A 氏インタビュー）

＜開かれた＞というときに、その場の参加者に同質性は求められない。セクシュアリティの話に限らない、他愛のない生活のこと、たとえば LOUD 内にある「中野おいしいお店情報」の情報集を手にとりながら好きな食べ物について共感を見つけるかもしれない。そのような会話の中から、ときに、目の前にいる相手が自分と異なるセクシュアリティを持つ存在だと気づくこともある。

「LG だけじゃだめで、トランスやエックス（X ジェンダー）や。だけど、多様性あるって気づくんですよ。セクマイ（セクシュアルマイノリティ）でも他のセクマイのことがわからなかったりするんですよ、大方。だからもうそういう時代から脱却して、いろんなカテゴリがあってっていうことを知っていくのが望ましいんですね。」とO氏は語る。

オープンデーでは、参加している人たちに同質性ばかりを求めない。演出家の平田オリザはコミュニケーションへの考察において、「どうすれば話しかけられるか」より「話しかける環

境、話しかけやすい状態」を意識する。そして、シンパシーから、エンパシー[26]「わかりあえないこと」を前提に、わかりあえる部分を探っていく営み」（平田、2012[xlv]）としてのコミュニケーションを提唱し、「喋らないという表現」もまたコミュニケーションであるとする。

性的マイノリティ女性の困難について―セクシュアリティが不確かで語り辛く、逸脱的とされる―というテーマをもって部分的に共感していくという形で、誰もがその場所にいることを否定されない、コミュニケーションの場所として成立している。

1-1-3.　“出ていける”関係性　―LOUD 外に繋げる

T 氏の例で挙げたように新しく活動を始める参加者や他団体に紹介していくといったケースは多く見られる。また、参加者に対して必要を感じたときはソーシャルワーカー的な対応として、専門機関などを紹介したりすることもあるという。

北海道の団体から紹介されて LOUD を訪れた M 氏は、北海道からパートナーと越してきたことをきっかけに、オープンデーに訪れた。LOUD で東京都内の活動団体について調べスタッフから話を聞き、紹介を受け、次回からはオープンデーでなく新しい団体で講演活動などを手伝っていきたいと述べる。そのような参加者についてスタッフは「色々選択肢ができることは当事者にとってはいいこと」で LOUD を「拠点として、どんどんいろんなところに行ってください」という態度であるという。

LOUD 内部で参加者の課題を抱え込まず、然るべき外の活動につなげている。

> *生保（生活保護）生活者も何人もここにきているので、そういう人たちもいますね。私たちはセクシュアルマイノリティのソーシャルワーカー的な側面もあるので。普段もそういう仕事をしているので。きちんと何か生じたときは、しかるべきところに繋げるようにといったことはやってきています。これは決して表には出しませんけれども。プライベートなことなんで。*（具体例は話せないが、法的手続き、行政の福祉や生活保護にまつわる支援をする、という。）*やはり生活が安定することで、気持ちも安定していくからねと。いつも生活が不安だとつらいじゃない、と。とにかくその根本の生活が安*

[26] シンパシーからエンパシー、について平田は教育学で注目を浴びている考え方と説明し、「同情から共感へ」「同一性から共有性へ」と表現している。

定することについてアドバイスするとか、ときには同行もします。一人で窓口行けなかったりとかさ。それとあと病気の問題なんかも、発達障害抱えているときは、こういう病院が評判良さそうだよとか。自立支援とか。一つの精神科と一つの薬局で一割安くかかれるんですよ。お薬高いから。手帳もってないの、とか、障害者年金申請してないの、とか。生活困窮とか問題抱えたら、そのへんの一連の話して。そうするといくらかの補助が出るのよ。これは働いてももらえ続けるんだねとか、障害者枠で働いてみるとか。ソーシャルワーカーがやる、そういうことは全部やります。メールとかで相談に乗ってもらえませんかと連絡がきたりして、そういうときは、じゃあこっちきて話そうかという風に。

（2015 年 8 月 25 日 O 氏インタビュー）

LOUD のオープンデーに参加者は、繰り返しオープンデーに参加し続けることではなく、参加者にニーズがある場合はスタッフが助言や他の活動団体等へつなげていくことがある。また、参加者同士でニーズを聞き合い、様々な活動を紹介しあうこともある。それは、運営スタッフの参加の持続可能性を担保するために限らず、個々の参加者のニーズが顕在化してきたときに、できる限り適した対応を取ろうとした結果でもある。オープンデーとは、そこに参加者がいることが最終目的なのではなく、ニーズが見えてくるまで留まっていられる場所であり、ニーズを満たそうとするときに通過されるような一時的な場として利用される。

このような、LOUD 以外の活動につながっていく可能性の前提には、LOUD という場所への安心感が見受けられる。たとえば「十年ぶりに参加した」という参加者の例のように“ある”こと、そして“行ける”場所であり、参加して“いられる”（本章 1-1-1.、1-1-2.）こと、さらには信頼できるスタッフがいることで空間が“安心”できるということを、参加者はオープンデーに参加する度に確認することができる。LOUD が前の建物でオープンデーを開催していたときから、参加者が床に座る「ちゃぶ台スタイル」も変わらず、「昔から同じ日曜日にやっているっていうのは、いちいち予定確認しなくていいって意味でさ、日常なんだよね」と語られる。安心、はいつでも戻りケアを受けることができるという物理的な保証も前提となっている。

しかし「オープンデーはずっと何年も来続けるというタイプではないんじゃないかな」と語られる。「安心」は行動に期待し、「信頼」は、そこに存在する意図に対して期待する。同質

性に基づいた「安心」できる集団から、そこにLOUDがあるのだという「信頼」（山岸、1999）[xlvi]を確立することによって、参加者はLOUD以外でもケアを受けていくことができる。

そして、＜開かれた＞場所であることは、ケアを受ける場所や関係性が広がるだけでなく、セクシュアリティだけを基底におくゲットーの集団に陥穽しないための回避策ともいえる。

同じ人たちが集まって傷なめあってるだけでそこにとどまっていたら意味ないと思うんだよね。だってそれって隔離でしょ。隔離して、社会のクッションとしてそういうものがあったら、「隔離するしかない」って認めちゃうことになる気がする。違うんだよね。落っこっちゃったていうかそういうときがあるとしたら、クッションじゃなくて階段なら、いいよね。社会に戻っていけるっていうか、そこにとどまらないでいいというか。

（K氏 2015/12/25 インタビュー）

K氏はレズビアンの自認を持ち、職場でカミングアウトはせずに社会で「闘い」ながら、大学卒業後仕事を続けている。

＜開かれた＞場所は、繰り返し語られる「安心」やシェルターであると同時に、そこに留まり続けることを参加者に求めず、無理解・無関心あるいは偏見のある社会の存在を否定しない。そのような生きづらい社会では、自らの＜生＞を黙殺することも黙殺されることもあり息苦しいこともあるかもしれない。それでも、自分の全てを承認されない社会で生活をしていかざるを得ない状況を前提として、LOUDは＜開かれた＞場所として当事者を引き受ける。ときに、LGBTをめぐる社会情勢やニュースといった情報を、参加者に伝える。世の中だって変わっていく、ということを伝えるのは「捨てたもんじゃない」という、生きづらさを抱える当事者にとっての希望になるという。この希望は、社会に＜開かれた＞場所であるからこそ、掲げることができるのだろう。セクシュアルマイノリティと呼ばれる当事者集団でさえ、一人一人の＜生＞とセクシュアリティは異なり、全てをわかりあうことは難しい。

1-2. 社会に＜開かれた＞場所、という意味

社会に＜開かれた＞場所、という本来のLOUDの設立目的と、実際に何を達成したのかについて更に意味を考えてみたい。LOUDは社会に「開かれた活動場所」という目的を持って設

立され、スペースを利用した団体会員の社会的な活動を支援したり、そのような連帯を可能にする出会いを生み出してきた。しかし、オープンデー参加者にとっての＜開かれた＞場所という意味を検討したときに、積極的な社会運動や活動とは違う意味が見出された。（Ⅴ章 1-1.）その点について検討していく。

1-2-1.　本来の目的―　社会に声をあげる

LOUD は、セクシュアルマイノリティ女性当事者らが安心して活動できる場所を目指して創立・運営されてきた。オープンデー以外のスペース貸し出しは、団体会員が活動する際に定期的に利用されるだけでなく、セクシュアリティに関するインタビューやミーティングなどに利用された。中野区区長の視察や行政のリーフレット上での広報、中野区の行政とセクシュアルマイノリティが協働する「にじねっと」のミーティングの実施などを見ても、地域における活動としての位置づけや発言力を持つような方向性がみられ、LOUD という場から生まれた社会活動も多く存在し”LOUD　MINORITY”として社会に声をあげる」という成果を出しつつあるとも考えられる。そして LOUD の活動が広く知られるようになるにつれて、たとえばよりそいホットラインの紹介先になるように、セクシュアルマイノリティ当事者がオープンデーにアクセスしやすくなるという点も見られる。

同時に、LOUD や LOUD オープンデーでの交流から、社会的な活動が生じることは、「社会に声をあげる」だけでなく、不安定なセクシュアリティを持つ当事者にとっての「自己肯定感や自己受容」にもつながるという。

> *かたやこういったコミュニティスペースというのは、当事者を主体としたものなので、当事者が自分一人では難しいけれども、仲間を募って何かやってみたいとか、何か共有したいとか、そういうことができることによって自己肯定感や自己受容といったものがどんどん備わっていって、その孤立感から解放されるであるとか、自分がセクマイでもいいんだっていうような自分の自己開示ができるためにこういう場所が必要だと思うんですね。*
>
> （2015/08/09　O 氏インタビュー）

この語りは、当事者を主体とした活動ができること、社会に声をあげることが、個人としての自己肯定につながるということを意味している。オープンデーに参加する T 氏（Ⅳ章）も、自分自身が他の当事者から聞いてきたことや、自らの経験の延長としてカウンセリングを始め

ていた。オープンデーから新しい当事者の活動や、社会運動や社会活動が生じることは、LOUD が活動場所として当事者を支援していこうという当初の創設目的と合致する。しかし、そういった各種の活動の目的達成だけではなく、一人一人の当事者にとって求められている経験が獲得されていく意味があるのだと考えられる。

1-2-2. 参加者に与える結果― 自分の声をみつける

セクシュアルマイノリティにとって「安心」というのは、「社会的な創傷」を受けないという意味での安心の感覚とともに、自分自身の語りを強要されないという意味ももつと考えられる。社会においてセクシュアルマイノリティ当事者は、自分自身がセクシュアルマイノリティであることを隠し通し、語らない。それは、たとえば自分がレズビアンであるとカミングアウトしたときの困難というものが、不承認―先行するイメージを押し付けられて自分について説明する機会を与えられないことや、歪められた承認―「どうしてレズビアンであるのか」といった質問攻めといった混乱につながることを知っているからである。

ケアの倫理を提唱したギリガンが使う“voices”には「声」という訳があてられるが、この意味については、能動・受動の「態」だけでなく、組織の内部改革のために影響力を行使しようとする「告発」や「語り方」（way of speaking）、「記述の様式」（modes of describing）の含意を持つ。（川本、1995）そのような意味において、一人一人の当事者が自分自身についてアイデンティファイし、トランスやレズビアン“かもしれない”参加者たちが語り方を模索するのは、自分自身の声をみつけることに他ならない。そして、アイデンティファイが、ひいては社会に声をあげることにつながる。セクシュアルマイノリティ当事者が、自ら活動していくという自分のセクシュアリティの確立以前の段階に、自分についてのアイデンティファイがある。

「当事者の本人が、自分から動くっていうところは、大事なんでしょうか」と尋ねたところ、以下の回答が得られた。

そこは最終的には大事ですよ。なぜならば、日本ではその主だったセクシュアルマイノリティの法の整備っていうのが遅れていますよね。性同一性障害の特例法である程度条件を満たせば、戸籍の性別の変更はできますけれども、例えば同性同士が結婚に準ずるような法律もないですし、差別禁止法のようなものもないですから、そういった時に何が必要なのかというのは立法というものを考えると、世論が本当に困っているのだから世論の理解も重要なん

ですね。これは国会議員の弁なんですけれども。そういったときに我々がどういったように困っているのか。実際いろんなところにいるんですよ、と、人口の5パーセントから7パーセントかもしれないし、少数派かもしれないし、そこかしこにいますよということを、やはり知っていくためにも、「貴方の傍にもいるんです」っていって、その当人がちゃんとセクシュアルマイノリティであるということをアイデンティファイすることは重要で、そこができるとカミングアウトができたりとか、どんどん遠回りかもしれないけれども広がっていくんですね。だから何かここにきて、刺激を受けて、自分もできることを何かやらなくちゃ、やりたいなと思えればしめたものですね。

（2015/08/09　O 氏インタビュー）

アイデンティファイは、各種の社会活動の前提条件として求められるだけではなく、「遠回りかもしれないけど」当事者が生きる日常における変化をもたらす意味で広がるという。ある、ひきこもり当事者の語りの研究においては、一人一人の当事者が当事者性を持った語りをもつことが、公に対する新たな社会運動としての意味を持つという分析がある。貴戸は、中西正司と上野千鶴子の当事者の定義「当事者主権とは―（中略）私がだれであるか、私のニーズが何であるかを代わって決めることを許されない、という立場の表明である」を参照しつつ、現代日本における若者雇用問題に着目し、有の現実を語ることによって異なる社会のあり方を描き出すことができる「当事者の語り」そのものが社会の表象となるような社会運動と位置付けた（貴戸、2007）[xlvii]。セクシュアルマイノリティの問題は、否定的な価値観とスティグマによるアイデンティティの揺らぎに困難がある点で、社会的な活動や状況のありかたが強調される「ひきこもり」とは質的に困難が異なるものの、個人的な困難が社会的な問題としての構造を負うことを自覚するプロセスについては共通する。掛札は、レズビアンとしてのカミングアウトや自認を獲得することについて「レズビアンになる」「レズビアンを引き受ける」と表現した（掛札、1994）。セクシュアルマイノリティとしての、セクシュアリティの自覚は、社会からの見られ方とスティグマとしてのレッテルを引き受けるとともに、カミングアウトの有無に限らず、そのような社会においてどのように振る舞い自分の＜生＞を決定していくのかについて、考え始める第一段階として位置づけられる。

鷲田清一は語りを「待つ」ことについて、相手の言葉を迎えに行くことが最悪の形だと論じる。「応え」のないところでは関係は起こらないし、人は前のめりで相手の「応え」を催促することも多い。それでも、「なんの「応え」もないままそれでも「応え」を待つということ、

それはその「応え」をいつか受け容れるものとして、それまで身を開いたままにしておくということ」であると述べ、相手の応えを受け入れることを「身を開く」と表現した（鷲田、2006）[xlviii]。参加者にとって＜開かれた＞場所、が意味するのは、セクシュアリティの確立を含めたあらゆる「応え」が強要されず、しかし受け容れられる場所であり、その瞬間が期待されつつも焦らされることのない場所なのだろう。

2. ケアのある場所としての意義

2-1.「場所というケア」及び 2-2.「不確かなセクシュアリティへのケア」では、分析や考察を通じた本論の結論を説明していきたい。つまり、LOUD の事例分析を通じて、何がケアであるとわかったのか（2-1.）、そして本論のテーマであるセクシュアリティというアイデンティティに対して何ができたのか（2-2.）について記述する。オープンデーでは、定まらない不確かなセクシュアリティについて配慮された場が設計され、その場において参加者同士あるいはスタッフとの交流がみられた。「安心できる」場であると同時に、それは他団体や社会につながる＜開かれた＞場所であり、そのことがまた一人一人の当事者にとって「自己肯定」といった意味を生み出し、そのことだけでも様々なタイプのケアが生じたようにも思える。

2-1. 場所というケア

LOUD という場所は、具体的な参加や会話、スペースの利用などの行為の積み重ねを通じて、そこに訪れる人からの信頼感を得てきた。＜開かれた＞場所で論じられた、そこにケアと思われるような人と人のあいだの働きかけを可能にすることが、LOUD という場所の意義だと考えられる。本論での一つ目の結論として、一時的に留まっていられるような居場所、その場所の存在そのものがケアとして成立していることを説明したい。

ケアの関係や、ケアが可能な場所があるとしても、永続的に密着したケアを受け続ける状態というのは現実味がない話であるし、セクシュアルマイノリティに対して無理解な社会で生活を営まざるをえない。

> *セクシュアル・マイノリティの人たちは、一生自分との闘いになる。100%オールオープンにはなれないし、<u>自分が違うのかなと思ったり、そういった自分との闘いが続く。</u>*
>
> （2015 年 11 月 8 日 T 氏ヒアリング）

Ｔ氏はレズビアンであるという自認があるが、自身のセクシュアリティについて、家族にはクローゼットでありフェイスブックの公開プロフィールにおいても隠している。カミングアウトをしないことについては、「クローゼットっていうのは、「人に言えない」ではなくて自分を守るために、あえて言わないことで誰かに反対されないということだと思う。…ヘイトの人もまだいるし、人に迷惑かけないし、自分の生活の安定のためのクローゼットを選ぶ。そう戦略ね。」と語る。

不確かなセクシュアリティは、オープンデーを通じて、少しずつ輪郭を描き出し、他者や外の活動との出会いを通じて「見えて」くる。しかしあるカテゴリとして確立したと思われるセクシュアリティもまた、社会の中で繰り返し否定され続ける。そのような永続的でない解決を前提とした、ケアとはどのようなものか。

かつてケアという言葉は、医療や介護のような人が人に対して介入し支援する、人と人の関係性を前提とした議論に端を発する。発達心理学者のキャロル・ギリガンが『もうひとつの声』（＝共同体や公共性、正義の議論の前提を揺るがし、「正義の倫理」（ethic of justice）に対する「世話の倫理」（ethic of care）の考え方）を提示した（川本、1995[xlix]）。現在では、ケアとは人が自立（自律）して存在する上で誰しもが受けてきたものとして改めて議論されるようになった。

「ケア」という用語の使われ方や定義について総括的に議論[27]する上野の「ケアの社会学」によれば、「ケア」の定義そのものは無意味であり、文脈依存的に個別のケースを見ていく必要があると指摘される。（上野、2011）[l]また近年のケア論を鑑みたエングスターはケアの最終目的について”The ultimate aim is to enable individuals to survive and function in society so that they can care for themselves and others and pursue some conception of the good life”（Engster、2007）としており、明確で直接的なニーズを満たすことだけがケアでないといえる。そうであれば、LOUD という場所は、その存在が参加者に対するケアとして成立していえるといえるだろう。

---

[27] ただし上野のケアの議論は当事者主権が前提となり、非統一的なニーズに自覚的な、当事者主権を行使しえない主体に対して有効かは議論が残るとされる。

LOUD へのニーズが、差別を受けたり傷ついたときに話ができるような、痛みの共有による連帯なのかどうか参加者にたずねたところ、「もしも社会から差別がなくなったとしても訪れる人がいるのではないか」という回答が寄せられた。以下の語りは、台湾では高校生の社会科のテーマとしてプライドパレードが扱われること、日本と比較して受容されているのではないかという議論のあとに生じたものである。

> *もし台湾だったら、LGBT とかの存在がちょっと認められているのかな。さっきの話だけど、もし差別とかが全てなくなって、これから存在が日本でも認められたとしても、こういう（集まり）は残るんじゃないかな。外では話せなくて話せるから来る、だけではなくて。（略）たとえばアメリカの黒人だけの集まりとか、ナントカ県人会とか、そういうのはやっぱり少数だから残るんだろうけれども。最近はそういうのないのかなって思うと、差別とかとは関係なく、みんな集まりたいというのはあるし。（略）セクシュアリティのこととか、そういうことを話したいなと思うときに。*　　（2016/1/10 R 氏インタビュー）

以上の語りから、LOUD の存在意義が必ずしも、シェルターだけの意味にとどまらず、自分自身のセクシュアリティ、アイデンティティなど、なにかについて話し確認し合うために訪れたいというニーズへの応答だとも読み解ける。

セクシュアルマイノリティとしての＜生＞は、当事者本人がその＜生＞を引き受けるときにも長い時間を要し、引き受けた後も社会での経験を通じて再び不確かになることもある。「一生続く自分との闘い」―ときにニーズさえわからなくなるような参加者の存在に対して、その状態に留まること・語り出さなくてもいいという態度をもって、引き受けていくのが LOUD という場所のケアだろう。

2-2.　不確かなセクシュアリティへのケア

トランス当事者が既存のセクシュアリティまたはジェンダーのカテゴリに定まりきらない違和を感じる（石井、2012）[ii]ことや、レズビアンやバイセクシュアル女性でさえ生まれたときから自分が「レズビアン」「バイセクシュアル」であると自覚しているのではなく、事例として挙げた語り手達は、モデルケースとの出会いや語る言葉を探るなかで、少しずつセクシュアリティを確立していることがわかる。そのような不確かなセクシュアリティは、異性愛規範に基づいた日常生活を送る中で社会的な創傷を受け、度々当事者による自問の対象となる。自分が間違っているのだろうか、どのように語るべきだろうか、そもそも語るべきではないのでは

ないか。カミングアウトしない当事者は、セクシュアルマイノリティとしてのアイデンティティさえ確立ができない見えない孤立を経験する。オネエ系タレントなどのイメージから外れた、かつ「シャイニくない」セクシュアルマイノリティは＜不承認＞または＜歪められた承認＞（堀江、2015）によって社会に存在しないように扱われる。社会からの否定と同じかそれ以上に、不確かなセクシュアリティは当事者自らによって「語り出すべきでない」痛みとなる。逆説的だが、“私的“なアイデンティティの中核を成すと思われるセクシュアリティのあり方が、当事者にとっては社会的関係に大きな影響を及ぼすような“公的“な話題として扱われることによって、顕在化されるどころか不可視のものとして追いやられる。そもそも、人が、自らの痛みについて、語る言葉のカテゴリさえ見つけられないとすれば何がケアとして成り立つのだろうか。

「痛み」をめぐる対談で発せられた鷲田清一の言葉を借りれば「痛みはひとを現在という時間の一点に閉じ込め、ここという空間の一点に閉じ込める。そういう意味で人を孤立させ」るという（熊谷、2013）[lii]。同書では、痛みに対しては随伴性サポート（pain-contingent support）と社会的サポート（general social support）が求められるという。随伴性サポートが「分節化されない痛みに対して限られた対処法で臨もうとする「依存先の集中」を招くサポートであるのに対して、後者は痛みとは関係のないところで「対処法の複線化」を開拓しようとするサポートとなる。痛みの記憶を核として、人と人が連帯し、強い共同体が立ち上がるということがある。たしかに随伴性のサポートは、共感することによって痛みを取り除いていこうとする試みであるため、直接人と人をつなげる働きがあると思われる。しかし、ある痛みという同質性の共有が共同体の条件とされるとき、その痛みを持たない他者が参加する術を持ちえない。

痛みによるつながりだけが、必ずしも幸福な関係になるとは限らない。たとえば、人は、ある痛みに対して「わかった」と言われれば言われるほど疎外感を覚えてしまうことがある（熊谷、2013）。共感や理解を示したことが、逆説的に、無理解であるというメッセージになることや、言われた側が語り出す機会を奪ってしまうことがある。自分自身が確信を持てないようなセクシュアリティを持つ当事者にとって、「あなたは何者ですか？（レズビアンなのか、トランスなのか、ヘテロセクシュアルなのか？）」という問いに確信を持って答えるのは容易でない場合がある。コミュニケーションにおける考察において「理路整然と伝えられる立場にあるなら、その人は、たいていの場合、もはや社会的弱者ではない。」（平田、2012）と述べられることがあるのは、語る言葉は、孤立の痛みを分節化できるからであろう。

不確かな（precarious）セクシュアリティは、いつ確立するかわからず、身近な存在にこそ語り出すことができないものとして見えない孤立を深めていく。場合によっては、レズビアンとレズビアンが出会う当事者間でさえ、「タチ」か「ネコ」か尋ねられるようなセクシュアリティの決定が求められ、自分について説明せざるをえない状況に置かれる。バトラーは、自分自身の存在についての語りを強要されることや、強要された語りによって他者からアイデンティファイされることの暴力性について論じる。

LOUD の意義が、不確かなセクシュアリティについて語り出さなくてもいい・留まれるということについて、再考していきたい。O 氏（Ⅳ章 5-2.）が「*F t X なのかもしれないといった決めていないときでも立ち寄ることができるのはいい。*」というように、決めていない“自分への不可視でさえ許容される”（Ⅳ章 5-1.）という。O 氏は現在においては LOUD やセクシュアリティの問いかけに対して、ためらわずに回答する様子が見られる。答えを留保できる場は、結果としてセクシュアルマイノリティ当事者が、強制されずに語り出すための場を提供しているといえるのではないだろうか。そのような意味で、参加者は LOUD を通じて自分自身に対して語り出すことができるようになるといえる。

バトラーの議論においては、人間は傷つけられやすく、それによって他者に応答する者として描かれ、（バトラー、2006）[liii]ジェンダー・アイデンティティは不可変ではなく連続した実践性が先に立つ行為遂行的な性質のものとして説明された。そして、どのように呼ばれるか、あるいはどのように名づけられるか／名づけられたいか、という承認の欲求は、他者から呼びかけられた時点で、その他者の言葉をもって自らについて語らざるをえなくなる（マリィ、2006）[liv]という。マリィはバトラーを引用する。「このように呼んで」という名づけの欲望「結局、他の人から名づけられることが、トラウマなのである。それはわたしの意図のまえに存在する行為であり、わたしを言語世界に導き入れる行為だが、そのときわたしは、その言語世界における行為体となりはじめている。」という説明は、他者を相手にしたとき、人はその関係性において一定のカテゴリらしく振る舞うことを指摘している。テイラーはリベラリズムの背景のもとに、主体にとっての善いあり方とはかけ離れたアイデンティティが要請される社会のあり方を問題提起する（Taylor、1992）[lv]。LOUD という場が、ケアの場として成り立つというとき、以下のように言えないだろうか。性急に多様性を求める社会からの要請に対して、人が傷つきやすくその要請に影響を受ける存在であることを認めつつも、どのように応答するか／しないかの価値判断を自らのものとして捉えなおすことを可能にする。人は、他者や社会から切り離せない存在である。そのことに自覚的であるからこそ LOUD のオープンデー

の取り組みは同質性のみに頼るコミュニティを設計しようとはせず、たとえば社会や外の活動につなげられる＜開かれた＞場として、個別の当事者のニーズを優先させようとしていた。ケアがその人のため（for good）であるということは、人が何者であるかについての語りを当事者自身から奪うことなく、他者との関係性を通じて構築され変化し続けるアイデンティティに配慮することにほかならないのではないか。

繰り返し鷲田の「待つ」ことについての考察を引用すれば、「意のままにならないもの、偶然に翻弄されるもの、じぶんを超えたもの、じぶんの力ではどうにもならないもの、それに対してはただ受け身でいるしかないもの、いたずらに動くことなくただそこにじっとしているしかないもの。そういうものにふれてしまい、それでも「期待」や「希い」や「祈り」を込めなおし、幾度となくくりかえされるそれへの断念のなかでもそれを手放すことなくいること」が「待つ」ことであるという。そして「待つ」こととは、誰かの言葉を迎えに行かず語りを「待つ」ことは「身を開く」と表現され、期待すら放棄された地点で相手の「応え」を受け入れる状態にあるという（鷲田、2006）。そうであるとすれば LOUD には、応えを受け入れるような＜開かれた＞形で、祈り続けることでしか保たれないように不確かな（precarious）セクシュアリティと＜生＞が語り出す瞬間を「待つ」場としてのケアの意義があると言えるのだろう。多様性を称揚するリベラリズムの背景において、人は何者であるかの語りを求められるし、アイデンティティの承認が「命にかかわるニーズ」（岡野、2006）として希求される。そのような状況下において、自分自身のセクシュアリティと、自分が何者であるかという問いに対して、一時的に答えを留められる場そのものがケアとなる。

セクシュアリティの不確かさが、いつ確かなものになるのかがわからない性質を持つとすれば、あるいはアイデンティティが他者によって引き出されて語られる性質だとすれば、不確かさを「待つ」ように受容されるケアは“セクシュアリティ”の問題に対して十分に求められ提供されていると考えられる。私たちは、自らについて語る言葉によって、自己を形成するとともに自己疎外される。それは「語りに従っている「私」が自分自身の多くの次元を包含することができないからでもある」（バトラー、2008）[lvi]。

そして、セクシュアリティに限らず、意のままにならない他者との関係によって定められる「人が何者として呼ばれるのか」というアイデンティティをめぐる議論において、回答の保留できる場はいつでもケアとなりうるのだろうか。これについては、今後の研究課題としたい。セクシュアルマイノリティをめぐるケアの議論は、当事者のためだけのものではないかもしれ

ない。なぜならば、人は誰でも語ることの難しいアイデンティティを持つことがあるかもしれない。何時・何処で・何事においても、常にマイノリティではないと断言できる人間はそれほど多くないはずなのだ。

参考文献

[i]似田貝香門，2006，「＜一人の人として＞をめざす支援の実践知」『ボランティアが社会を変える　支え合いの実践知』株式会社関西看護出版，95-126.

[ii] ジュディス・バトラー,2012『戦争の枠組　―生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子訳,筑摩書房.

[iii] 清水晶子,2013「ちゃんと正しい方向にむかっている―クィア・ポリティクスの現在」『ジェンダーと「自由」理論、リベラリズム、クィア』三浦玲一・早坂静編,彩流社.

[iv]堀川修平「日本におけるセクシュアル・マイノリティ＜運動＞の変遷と特徴――＜運動＞の「運営」と「参加者」に着目して――」（埼玉大学大学院教育学研究科　2014 年修士論文）

[v] 2CHOPO LGBT のためのコミュニティサイト　まきむぅの虹色 NEWS サテライト http://www.2chopo.com/article/detail?id=1236

[vi] “渋谷同性パートナーシップ” への恨みを吐露!? サムソン高橋 の 2015-2016 年末年始 LGBT 放談(前編)　http://life.letibee.com/culture/samson-lgbt-talk-1/

[vii]伊藤真一,2005「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房:43-76.

[viii] 河口和也,2003『クィア・スタディーズ』岩波書店.

[ix] 小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編,2014,『変容する親密圏―セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会.

[x]堀江有里,2010,「同性間の〈婚姻〉に関する批判的考察―日本の社会制度の文脈から―」『社会システム研究』第 21 号:37-57.

[xi] 小倉康嗣,2001「ゲイの老後は悲惨か？―再帰的近代としての高齢化社会とゲイのエイジング」伏見憲明編『クィア・ジャパン vol.5』,勁草書房.

[xii] 永易至文、2015「生活に根差した性的マイノリティの老後を考える」『現代思想』青土社、43:16.

[xiii] 佐藤恵,2010,『自立と支援の社会学―阪神大震災とボランティア―』東信堂.

[xiv] *Engster, Daniel, 2007, The Heart of Justice: A Political Theory of Caring, Oxford UP.*

[xvxv]原田雅史，2005，「セクシュアル・マイノリティとヘテロセクシズム――差別と当事者の心理的困難をめぐって」『ジェンダー研究』8:25: 145-147

[xvi] 前川直哉, 2014「1970 年代における男性同性愛者と異性婚―『薔薇族』の読者投稿から」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『変容する親密圏/公共圏　セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会.

[xvii]成元哲, 2004，大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人、編「なぜ人は社会運動に関わるのか――運動参加の承認論的展開」『社会運動の社会学』有斐閣.

[xviii]日高康晴・市川誠一・木原正博, 2004,「ゲイ・バイセクシュアル男性の感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究」『日本エイズ学会誌』6:165-173.

[xix] 針間克己, 平田俊明，石丸径一郎，葛西真記子，古谷野淳子，柘植道子，林 直樹，松髙由佳,『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援―同性愛, 性同一性障害を理解する』岩崎学術出版社.

[xx]　古川誠, 1996「同性愛の比較社会学　レズビアン/ゲイ・スタディーズの展開と男色概念」井上俊他編『セクシュアリティの社会学』岩波書店.

[xxi] 風間孝 1997「クィアはどこからきたが　クィア・セオリーにおける理論と実践」『別冊アイデンティティ研究会』動くゲイとレズビアンの会.

[xxii] 大坪真利子, 2013「言わなかったことをめぐって―カミングアウト＜以前＞についての語り―」『ソシオロジカル・ペーパーズ』.

[xxiii]掛札悠子，1992，『「レズビアン」であるということ』河出書房新書.

[xxiv]金田智之，2003，「カミングアウト」の選択性をめぐる問題について」『社会学論考』24.

[xxv] 草柳千早，2004，「「生きづらさ」と「アイデンティティ」」『「曖昧な生きづらさ」と社会クレイム申し立ての社会学』世界思想社.

[xxvixxvi] 北澤毅・古賀正義編, 1997,『社会を読み解く技法－質的調査法への招待』福村出版.

[xxvii] 佐藤郁哉, 1998,『フィールドワーク　書を持って街へ出よう』信曜社.

[xxviii] 溝口彰子・岩橋恒太・大江千束・杉浦郁子・若林苗子, 2014,「クィア領域における調査研究にまつわる倫理や手続きを考える：フィールドワーク経験にもとづくガイドライン試案」『ジェンダー＆セクシュアリティ第９号』国際基督教大学ジェンダー研究センター.

[xxix] ジグムント・バウマン, 2007,『アイデンティティ』株式会社日本経済評論社.

[xxx] *JudithButler,1990, Gender trouble. Feminism and the subversion of identity, Routledge.*

[xxxi] 岡野八代,2006,「「承認の政治」に賭けられているもの ： 解放か権利の平等か」『法社会学』64.

[xxxii] 野崎泰伸,2004,「当事者性の再検討」『人間文化学研究集録』14.

[xxxiii] ヴァネッサ・ベアード,2005,『性的マイノリティの基礎知識』作品社.

[xxxiv] ケリー・ヒューゲル,2011,『LGBTQってなに？―セクシュアル・マイノリティのためのハンドブック』明石書店.

[xxxv] 上野千鶴子,1995「「セクシュアリティ」の近代を超えて」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編集『日本のフェミニズム⑥セクシュアリティ』岩波書店.

[xxxvi] 深海菊絵,2010「意志による「愛」と意志の限界にある「愛」―米国におけるポリアモリー実践の事例から―」vol5.

[xxxvii]上野千鶴子,2009,「日本のリブ――その思想と背景　付増補編解説　記憶を手渡すために」『新編日本のフェミニズム１.リブとフェミニズム』岩波書店.

[xxxviii]飯野由里子,2008,『レズビアンである＜わたしたち＞のストーリー』生活書房.

[xxxix]掛札悠子, 1992, 『「レズビアン」であるということ』河出書房新書.

[xl] 動くゲイとレズビアンの会,1995,『動くゲイとレズビアンの会第10期年間総会報告書』

[xli] 赤枝香奈子,2014,「第６章　戦後日本における「レズビアン」カテゴリーの定着」『変容する親密圏／公共圏８セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版.

[xlii]藤谷 祐太,2008「トラブルを起こす／トラブルになる――1990年「府中青年の家同性愛者差別事件」と1991年から1997年の「府中青年の家裁判」を事例として」『CoreEthics』立命館大学,4:319-332.

[xliii] 小澤かおる,2014,「性的少数者のライブラリ・アーカイヴはなぜ重要か：LOUDライブラリの場合」『社会学論考』35,1-28.

[xliv] 伏見憲明,1998,『プライベート・ゲイライフ―ポスト恋愛論』学陽文庫.

[xlv] 平田オリザ,2012,『わかりあえないことから』講談社現代新書.

[xlvi] 山岸俊男,1999,『安心社会から信頼社会へ―日本型システムの行方』中央公論新社.

[xlvii] 貴戸理恵,2007「「当事者の語り」の理論化に向けて―現代日本の若者就労をめぐる議論から―」『ソシオロゴス』31.

[xlviii] 鷲田清一, 2006, 『「待つ」ということ』角川選書.

[xlix] 川本隆史, 1995, 『現代倫理学の冒険―社会理論のネットワーキングへ―』創文社.

[l] 上野千鶴子, 2011, 「第１章ケアとは何か」『ケアの社会学―当事者主権の福祉社会へ』太田出版.

[li] 石井由香理, 2012, 「カテゴリーとのずれを含む自己像――性別に違和感を覚える人々の語りを事例として ――」『社会学評論』63.

[lii] 熊谷晋一朗・大澤真幸・上野千鶴子・鷲田清一・信田さよ子, 2013, 『ひとりで苦しまないための「痛みの哲学」』青土社.

[liii]ジュディス・バトラー, 2006, 「平和とは戦争への恐ろしいまでの満足感に対する抵抗である」西亮太訳『現代思想』青土社, 34:12.

[liv]クレア・マリィ, 2006, 「結局、他の人から名づけられることが、トラウマなのである」『現代思想』青土社 34:12.

[lv] *Charles Taylor, 1992 “The Making of the Modern Identity” Cambridge University Press.*

[lvi] ジュディス・バトラー, 2008『暴力論叢書 3　自分自身を説明すること――倫理的暴力への批判』佐藤嘉幸・清水知子訳, 月曜社.

謝辞

はじめに、指導教官の清水亮先生に厚くお礼申し上げます。修学を志したときの「初めの炎」に調査という形で向き合い、復学して、研究という形で取り組むことができたのは、長く切らずにつきあい続けてくださった、熱心なご指導のおかげです。先生のおかげで、わからないことだらけの社会に対して、一つの答えを出す試みとしての論文を作成できました。

休学及び復学、論文提出を許可して下さいました社会文化環境学専攻の先生方にも重ねてお礼申し上げます。修士課程に 4 年間在籍できたことで、いくつかの書籍についてじっくりと考えることができました。大学院入学時の指導教官である鬼頭秀一先生からは研究の面白さと「現場」の奥深さについてご鞭撻いただきました。副指導の福永真弓先生には、論文テーマの先行研究への助言と、提出直前まで議論の本質を捉えるためのコメントをいただきました。

そして LOUD 運営スタッフの大江様、小川様、鹿賀様、参加者の方々には、本研究遂行にあたりひとかたならぬご協力を賜りました。前川直哉先生、石川大我様、上杉崇子先生、東京レインボープライド、PinkDot!沖縄、台湾同志遊行関係者各位には、稚拙な質問にも丁寧に対応して頂きました。各人の取組みは、機知やユーモアを備えた力強さに満ちていました。

「ケア」と「セクシュアリティ」は、保健室と東大駒場を往来した、サボリ魔時代からの関心で、高校中退・就職ではなく大学進学を決断した動機の一つでした。「そんなに話せるなら文章を書いたら」と勧めて下さった荻野先生、駒場キャンパス今ゼミの皆様、慶應義塾大学の、坂明先生・FreedmanDavid 先生・小林光先生には、生きるために学ぶ姿勢、修復的司法・クィアスタディーズ・環境政策の視点を学びました。大学院休学時の勤務先、自然環境研究センターでは、動植物の生態と公共政策の仕組みに触れる機会を得ました。清水研究室の皆様には、いつも活発な議論でお世話になりました。前日に校正して下さった宝田さん、望月さん、折戸さん、当日の（印鑑探しを含めた）提出準備を手伝って下さった清水さん、三枝さん、ご協力ありがとうございました。また、東京農工大学の本多さんには論文構成の面からも支援いただきました。ならびに、いつでもクールなきなさん、優しさで突き進むかすみさん、その他慶應 SFC の友人達からも常にアドバイスいただき、様々な議論につきあってもらいました。いずれも本稿を纏める上で欠かせなかった知見です。加えて、「よくわからないけど」と言いながら、論文提出まで辛抱強く待ってくれていた家族には、感謝し尽くせません。

2015年1月に、かつて家族のように過ごした先輩の訃報を受け、ある春のゼミの日に、本テーマへの関心についてカミングアウトしたときには、これまでにない恥ずかしさを感じました。研究を進めるほど、公私ともに新たな困難が生じる一方、その度に誰かに助けられ、新しい出会いをつないでもらいました。本文に直接記載はしないもののインド・シンガポール・台湾でも重要な示唆を得ることができました。

2016年1月の論文提出前に、カリフォルニア暮らしの長い友人から「シャイニーだからゲイになれるんじゃないのか」と素直に問われたとき、人はスティグマをばねに困難に立ち向かえるのか、強い者だけが生き延びたのか、と考えあぐねました。今でも答えは見えませんが、休学を決めたときに清水先生が声かけてくださった「散歩するように」生活するなかで、いつかわかるようになるときを待ちたいと思います。

まだまだ伝えたいことも多く、全て書き残そうとすれば随分と冗長な謝辞になってしまいそうです。語り切れないことばかりですが、ここで、筆を置かせて下さい。

論文提出に至ることができた恵まれた環境、及び一人一人から頂いた励ましと暖かなケアに対し、改めて御礼申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

本当に、ありがとうございました。

2016年1月25日　東京大学柏の葉キャンパス環境棟「文系院生室」にて